教育実践報告

中部大学･学芸員課程「博物館展示論」2022･2023

小川裕紀
（愛知県陶磁美術館　主任学芸員）

［概要］

大学の学士課程で行われる学芸員養成課程は、実態として専門基礎教育かつ専門教養教育として機能している。専門的な技術性よりも、文系･理系の総合的な基礎科目として、教養的な基礎能力の養成を重視して行う博物館科目の実践報告として、2022 年度･2023 年度の中部大学･学芸員課程における「博物館展示論」の概要を紹介する。

［構成］

はじめに
　1 本稿について
　　本稿の目的、本稿の構成
第Ⅰ部　計画
　2 基本計画
　　本講の目的･目標、概説シラバス、レジュメ
　3 詳細シラバス
　　各授業のねらいと参考文献（参照頁）
第Ⅱ部　実施と評価
　4 実施
　　概況、受講生の提出課題
　5 評価
　　成績評価、受講生による本講の評価、本講の総合的評価
おわりに
　6 学芸員養成教育の位置付けに関する一考察
　　専門基礎教養教育としての博物館科目
資　料
　　レジュメ、学期末レポート課題、実施概況、学生質問及び講師回答

はじめに

1 本稿について

1-1 本稿の目的

中部大学において学芸員課程は、2021 年度までは国際関係学部国際学科（NN)、人文学部日本語日本文化学科（HJ)、同コミュニケーション学科（HI)、同歴史地理学科（HH）の希望学生が履修可能であった。これに対して 2022 年度からは、上述の学部学科に加えて、応用生物学部環境生物科学科（FS）の学生も履修可能となった。この結果、学芸員課程の受講者数は従来一学年あたり二十名前後であったものが倍増し、文系と理系の学生が一堂に会して履修することとなった。

筆者は 2022 年度、2023 年度に中部大学･学芸員課程における授業「博物館展示論」(半期･2 単位)を非常勤講師として担当した。本講は概ね 2 年生を対象として開講し、受講者の多くを HH、FS、HJ の学生が占めていた。本稿では、本学学芸員課程の歴史的な転換点における記録として、授業概要－文理の学生を対象とした専門教養教育としての博物館展示論－を提示し、大学における学芸員養成教育関係者の参考に供することとしたい。

1-2 本稿の構成

本講では、年度当初からシラバスを大学 web サイトにおいて公開している。また、開講前には、各授業のレジュメ及び詳細シラバスを学内教学システムにおいて履修登録学生に対して掲示している。授業は対面形式により、レジュメ及び参考資料を紙媒体で配布している。受講生が講師に提出する事前課題や質問等については、毎授業終了後に紙で提出し、講師が編集の上で次回授業までに配信、または授業において配布している。本稿では、このうちシラバス、詳細シラバス、レジュメの全てと、学生質問及び講師回答の一部を掲載する。

本稿における概説シラバスは、大学公式 web サイト掲載前の元原稿を再構成したものである。また、詳細シラバスは、2023 年度配布資料と同一である。また、学生質問及び講師回答については、2022 年度における本講の全体的な事項を対象とした回から主要なものについて掲載している。

第Ⅰ部 計画

2 基本計画

2-1 本講の目的･目標

大学における学芸員課程は制度上、形式的には資格者養成教育、すなわち専門教育（専門基礎教育）として行われることを第一としつつ、実際の大学教育においては専門教育に止まらない性格を併せもっている。

博物館及び学芸員課程における博物館論は、博物館資料のみならず博物館機能論の上でも人文、社会、自然の三分野にわたることから、学芸員課程科目は大学の一般教育としての親和性があるといえる。また、博物館は実物資料を主たるメディアとして取り扱うことに特徴があり、学芸員課程における博物館論は、博物館リテラシー教育に止まらない、非言語的コミュニケーション能力の向上に寄与することができる。これらのことから、学芸員課程における博物館論はメディアリテラシー教育、コミュニケーション能力向上を通じた実践知の育成、すなわち大学における教養教育の一翼を担っているといえよう。

総体としては、学芸員課程における博物館論は専門教育と一般教育が重なり合う教育領域「専門基礎教養」科目であり、かつ学士課程で行われる博物館論は、大学における専門教養教育として行われる。ここで目指されるのは、文化的な情報デザイン力の育成であり、これを通じた知性の向上、教養の形成である。

2-2 概説シラバス「博物館展示論」

2-2-1 計画

[カリキュラムの中での位置付け]

学芸員課程における必修科目の一つで、博物館に関する基礎知識－ミュージアムベーシックス Museum Basics のうち、博物館の展示機能に関する基礎的な知識を習得する。

基本的に専門職養成課程の科目だが、技術的な専門性よりも人文、国際関係、応用生物各学部の総合的な基礎科目として、教養的基礎能力の養成を重視する。博物館展示についての学習を通じて、モノを並べて見せる/見ることの意義を考える、知的基盤の構築を目指す。

[身につく基礎力]

クリティカル思考力（人間や文化についての知識・技能を活用するための、思考力･判断力･表現力）

自己理解力（人文科学、社会科学、自然科学の素養を備えた社会人として、自分自身や自分の文化を客観視するための力。主体性を持って多様な人間と協働し、学び続ける態度を身に付けるための基盤）

[授業の趣旨（概要）]

本科目のねらいは、展示の歴史、展示メディア、展示による教育活動、展示の諸形態等に関する理論及び方法に関する知識･技術について学び、博物館の展示機能に関する基礎的能力を養うことである。主に歴史民俗系博物館と美術館の展示事例を通じて、「博物館展示の意義」（第 01-05 講）、「博物館展示の実際」（第 06-10 講）、「展示の解説活動」（第 11-14 講）の三分野について概観し、これらの総合として大学博物館の見学を行う（第 15 講）。

［具体的達成目標］

博物館展示を企画･計画、実施するために必要な知識･技術や、その背景となる理論を用いて、既存の博物館展示の構造と要素をトータルで把握して分析し、その機能や意義を総合的に考察することができる。

［授業計画］

（内容）　　→構成（本稿 2-2-2）

（授業外学習）→事前課題（授業外学習）（本稿 2-2-3）

［授業方法］

講義形式を基本とする。毎授業の最後にコミュケーション･ペーパー（講師から受講生への事前課題に対する受講生回答、受講生から講師への自由質問･意見･感想）の提出を求める。受講生からの主な回答及び質問について、次回授業の冒頭で講師が紹介、回答する。コミュケーション･ペーパーは記名提出だが、次回授業では匿名かつ個人を特定されないように適宜内容を講師が改変、編集したものを配布して紹介、回答する。

［成績の評価方法］

毎授業後提出のコミュケーション･ペーパーの記入状況を参考値として用いつつ（予定）、基本的には学期末レポートにより行う（100%）。期末テストは行わない予定である。

→学期末レポート（本稿 2-2-4）

［成績の評価基準］

学期末レポート評価の観点は、「レポート対象館の展示事業の全体像や、レポート対象常設展示の概要、パネル･キャプションの特徴等を正確に把握しているか」（知識･技能）、「講義内容を踏まえた分析･考察が行われているか」（思考力･判断力）、「レポートとしての構成力、文章力があるか」（表現力）。いわゆる「学力の三要素」－知識･技能、思考力･判断力･表現力、関心･意欲･態度（主体的に学習に取り組む態度、以下本項では「意欲」）－のうち「意欲」については、本授業においては知識の習得を通じて生じるものととらえ、知識･技能等の観点に含めて評価する。

本授業において「平素の学修」として重要な意義をもつのは、各種博物館の展示見学を通じて、各授業の内容―博物館展示の基盤となる理論や、実践に関する知識と方法－について実感的に理解を深めることであり、その学修こそがレポート対象館の選択から事実の把握･報告、分析･考察へと直接的に繋がっていく（この過程で形成される、学びに向かう姿勢が「意欲」である）。

［教科書］
なし。原則として、毎回レジュメ（本稿 2-3）を配布し、参考となる資料類を適宜添付する。

［参考文献］
別途提示する。→教育･学修のてびき（本稿 3）

2-2-2 構成

［展示の意義］

第 01 講
　コミュケーションとしての展示－モノを並べて見せるとは何か?－
　　基本用語、博物館展示原論、展示の作用
第 02 講
　展示史Ⅰ－日本人は、モノをどう見せてきたか?－
　　原始･古代、中世･近世初期、近世、近現代
第 03 講
　展示史Ⅱ－見せる/見ることで、何が起きたのか?－
　　「驚異の部屋」、近代博物館の成立と万国博覧会、博物館展示の政治的効果
第 04 講
　調査研究と展示－事例紹介：陶磁美術館における研究と展示のライフサイクル－
　　古陶磁狛犬、指定文化財
第 05 講
　展示の政治性と社会性－戦争展示と現代美術展示をめぐって何が起きているのか?－
　　戦争展示、現代美術展示

［展示の実際］

第 06 講
　展示の諸形態－展示を見る/考えるポイントは?－
　　代表的な分類基準と類型、専門分野別分類
第 07 講
　展示の制作Ⅰ－企画展示をどうやって企画するのか?－
　　企画･計画
第 08 講
　展示の制作Ⅱ－企画展示を開催するために、必要な実務とは?－
　　借用･運搬、印刷物、展示工事、展示作業、管理･運営
第 09 講
　展示の技術－資料を守り、資料を見せるための技と美とは?－

構成デザイン、環境管理、照明、展示什器

第 10 講

計画と評価－なぜ、その常設展示を開催するのか?－

展示計画、展示評価

［展示の解説活動］

第 11 講

展示の解説活動－博物館における解説の理論と方法は?－

基本設定、広義の「博物館教育」の諸問題、展示解説の方法

第 12 講

サイン･解説－歩きながら、立って読んでもらうための工夫とは?－

基本構成、フォーマット･デザイン、人間工学上の基礎知識

第 13 講

展示解説書Ⅰ－ワークシートと解説シートの違いは?－

ワークシート、解説シート

第 14 講

展示解説書Ⅱ－展示図録は作品集か解説書か－

考え方、制作、ミュージアムにおける出版物マーケティング

［総合］

第 15 講

展示を見る－中部大学民族資料博物館はどこがスゴいのか?－

大学博物館、博物館展示論的見学のてびき

2-2-3 事前課題（授業外学習）

授業外学習として各授業の事前に各自回答を一定程度考えておき、授業の内容を踏まえて、各授業の最後にコミュニケーション･ペーパーに記入、提出する。

［展示の意義］

第 01 講 コミュケーションとしての展示

あなたがこれまで見た博物館展示で、最も印象深かったもの、または人に勧めたいものについて、概要と理由を回答すること（複数可）。

第 02 講 展示史Ⅰ

本講で取り上げた事例以外で、あなたが日本史上注目すべきと思われるディスプレイについて、概要と理由を回答すること（複数可）。

第 03 講 展示史Ⅱ

あなたにとって、印象深いディスプレイ（博物館展示以外）について、概要と理由を回答

すること（複数可）。
第 04 講 調査研究と展示
受講生の居住地に所在する指定文化財のうち任意の一つについて、指定の理由や、展示公開状況について調べてみること（授業後の課題提出不要）。
第 05 講 展示の政治性と社会性
神社や寺院についての展示紹介は、どのような課題があると思われるか。特に公立博物館における宗教展示は、どのような条件下で可能となるのか。

［展示の実際］
第 06 講 展示の諸形態
あなたがこれまで見た博物館展示で最も印象深かったもの、または人に勧めたいものについて、本講紹介の用語を駆使して説明すること（展示の一部でも可）。
第 07 講 展示の制作Ⅰ
本学附属三浦記念図書館 1 階エントランスホール壁面展示ケース（右側のみ）を使ったミニ企画展示を企画構想すること（展示タイトル、テーマ・大まかな内容）。
第 08 講 展示の制作Ⅱ
本学附属三浦記念図書館 1 階エントランスホール壁面展示ケース（右側のみ）を使ったミニ企画展示を企画構想すること（開催要項の書式）。
第 09 講 展示の技術
本学民族資料博物館を見学しておくこと。特に展示構成、会場レイアウト、動線、展示ケースや展示具、照明について注視して見学すること（授業後の課題提出不要）。
第 10 講 計画と評価
第 01 講から第 10 講までの内容に関連して、一人一つ質問を提出すること。ただし、レポートに関する事項は、これとは別途に質問してよい。

［展示の解説活動］
第 11 講 展示の解説活動
博物館で人か機器による解説を受けた体験があれば、概要を報告すること。または博物館以外で、人か機器による解説で印象深かったものを報告すること
第 12 講 サイン・解説
本学民族資料博物館を事前に見学し、印象に残ったパネル、キャプションを一つラフスケッチして、長所または改善点等を付記して提出すること。
第 13 講 展示解説書Ⅰ
＊＊＊博物館の公式 web サイトでワークシートを閲覧し、その特徴をつかみ、本講紹介の内容を踏まえて講評すること。
第 14 講 展示解説書Ⅱ

美術館の企画展示図録と、歴史民俗系博物館の企画展示図録を、読んで眺めて比べて見て、特徴をつかむこと（授業後の課題提出不要）。

［総合］

第 15 講 展示を見る

本学民族資料博物館の公式 web サイトと、同サイトに掲載されている「年報」を閲覧して、館の概要と常設展の動向を把握しておくこと（授業後の課題提出不要）。

2-2-4 学期末レポート

本講におけるシラバス上の「具体的達成目標」は、「博物館展示を企画・計画、実施するために必要な知識・技術や、その背景となる理論を用いて、既存の博物館展示の構造と要素をトータルで把握して分析し、その機能や意義を総合的に考察することができる」と設定している。この目標の達成度を測定するために、受講生には博物館展示を対象とした学期末レポートの作成提出を課し、講師はこの学期末レポートのみによって成績評価を行っている。

レポート課題の基本設定は、「本学民族資料博物館及び愛知県陶磁美術館以外の、任意のミュージアムへ行き常設展示を見学する」である。また、内容は「該当館の博物館展示事業及び、その常設展示のうち一つの概要、並びに特徴的なパネル・キャプションについて論じる」ことを指定している。2023 年度レポート課題については、本稿 P**に掲載。

提出期限を除く、課題の基本的事項、レポートの標準的な構成、評価の主要観点、留意点については第 1 回授業で明示し、解説している。また、各回の授業や、第 14 回授業で行うレポート対策講義では、レポートにおいて記述を要求する各内容事項と、各授業における内容事項との対応関係を解説している。

レポートに直接関わる授業は、第 6 講「展示の諸形態」、第 7 講「展示の制作Ⅰ」、第 9 講「展示の技術」、第 10 講「計画と評価」、第 11 講「展示の解説活動」、第 12 講「サイン・解説」である。評価の主要観点として、レポート対象館の展示事業の全体像や、個別事業＝レポート対象展示の構造等を正確に把握し、講義内容を踏まえた分析、考察を行うこと、さらにレポートとしての構成力と文章力を指定している。

なお、受講生による学期末レポートの概要及び成績評価の概要については、本稿 4「評価」において後述。

2-3 レジュメ

2023 年度配布レジュメを、本稿末尾に資料として掲載している。参考資料については掲載省略。

3 詳細シラバス「教育・学修の手引き」

大学の授業は、学習者の自学自習を前提とし、その知的オリエンテーションとして実施

するものである。授業前及び授業並びに授業後における学習ー学修の参考に資するため、各授業の概要や学修のポイントー事前課題の解説を含むー、授業内容に直接関係する文献、関連文献や展示などについて、以下に予め紹介する。

［授業概要］

本科目でいう「博物館」とは、調査研究に基づき、実物資料によって情報発信する社会教育機関・施設で、総合博物館・歴史博物館・美術博物館（美術館）・科学博物館・動物園・水族館・植物園等の総称である。博物館の情報発信は、具体的形態としては、主に展示事業及び教育・普及事業として実施される。広義の「博物館教育」は展示事業と教育・普及事業の総体を指し、狭義の「博物館教育」は展示事業を除く教育・普及事業を指す。本科目では上記のうち、博物館の展示事業に焦点をあて、関連する理論及び方法に関する知識・技術を概観する。博物館における展示の特質を学び、モノを並べて見せる/見ることについて理解を深める一助としてほしい。

本科目は「博物館法」（第五条）、「博物館法施行規則」（第一条）に基づく学芸員養成課程科目である。構成は「図書館法施行規則の一部を改正する省令及び博物館法施行規則の一部を改正する省令等の施行について（通知）」（Ⅱ2（1）、別添3）に準拠している。本科目の成立経緯については、これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議「学芸員養成の充実方策について」（「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」第2次報告書）2009年で触れられているので、事前に参照するとよい。

本授業担当の非常勤講師・小川裕紀（おがわ・ひろき）は、愛知県陶磁美術館主任学芸員 兼愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室主任学芸員である。

［第01講］コミュニケーションとしての展示

＊本講では、（1）基本用語、（2）博物館展示原論、（3）展示の作用について扱う。まず陳列、展示といった基本用語をつかみ、博物館展示の特徴を捉えた上で、モノを並べて見せることの意味を考える。

（1）基本用語については、大堀哲・水嶋栄治編著『博物館学Ⅱ』学文社 2012 年の P25-26「展示という用語」を参照。一般的な博物館展示論では、陳列から展示への発展が説かれるが、本当にそうなのか、自分で考えてみるとよいだろう。

（2）博物館展示原論については、里見親幸『博物館展示の理論と実践』同成社 2014 年の P20-22、『博物館学Ⅱ』の P19-28 を参照。商業的展示、特に展示型陳列と比較しつつ、博物館展示の特徴を捉え、説明できるようになろう。

(3)展示の作用について、①は川口幸也編著『展示の政治学』水声社 2009 年の P13-40 川口幸也「展示」を参照。②は浅羽通明『澁澤龍彦の時代』青弓社 1993 年の P37-111 を参照。③はフランソワ・メレス／アンドレ・デバレ著、水嶋英治訳『博物館学・美術館学・文化遺産学基礎概念事典』(原著・仏語 2011 年、邦訳・東京堂出版 2022 年の P383-P399 を参照。展示がもつ力、人に与える影響、人にとっての意味を理解すること。博物館展示にとどまらず、ファッション、化粧、ガーデニング、乗用車にぬいぐるみを大量に飾ることなど、何かを人に見せることの意味を改めて考えてみるとよいだろう。学芸員課程・博物館学以外の文脈で、博物館がどのように評価されているかを知ることで、博物館という存在の多義性を理解できるようになるに違いない。

＊本講は第 1 講なので、博物館展示体験をめぐる受講生の動向を把握、共有するため、事前課題は受講生自身の博物館展示体験についてのアンケートとした。次回授業の冒頭で、匿名形式の一覧表にして配布する。

［第 02 講］展示史 I

＊本講では、日本におけるディスプレイの歴史を、(1)原始・古代、(2)中世・近世初期、(3)近世、(4)近現代の順に概観する。受験日本史ではまず勉強しそうもない、ディスプレイという視点で日本史をたどる。時代によって、モノの見せ方も変わるのだ。

(1)原始・古代、(2)中世・近世初期、(3)近世については、里見親幸『博物館展示の理論と実践』同成社 2014 年の P3-8 を参照。加藤有次ほか編著『博物館展示法』雄山閣 2000 年の P6-13 にも概説がある。小学校以降これまでの日本史学習の過程で眼に触れてきた、様々な画像を思い浮かべ、あるいは画像を自分で収集して、前近代の日本ディスプレイ史を自分なりに構築してみるとよいかもしれない。

(4)近現代については、『博物館展示の理論と実践』の P8-14 のほか、日本展示学会『展示論』2010 年 雄山閣の P18-21 を参照。日本の博物館史については、学芸員課程「博物館概論」でも扱われるであろう。大堀哲・水嶋栄治編著『博物館学 I』学文社 2012 年の P62-67 に、日本近代博物館史がコンパクトにまとめられている。正統的な日本近代博物館史学習の導入としては、関秀夫『博物館の誕生』岩波書店(岩波新書) 2005 年が手頃だ。こうした正史には載らないランカイ屋たちの活躍については、橋爪紳也『人生は博覧会 日本ランカイ屋列伝』晶文社 2001 年が楽しい。

＊本講の事前課題として、日本史上の注目すべきディスプレイを考え、授業当日に回答するよう指定している。自分の推しディスプレイや、こんな事物をディスプレイとして捉える視

点があったのか、というような独創性あふれる回答を期待している。次回授業の冒頭で、匿名形式の一覧表にして配布する。

［第 03 講］展示史Ⅱ

＊本講では、(1)「驚異の部屋」、(2)近代博物館の成立と万国博覧会、(3)博物館展示の政治的効果を扱う。ヨーロッパにおける近代博物館の成立史をたどり、博物館展示が近代社会において政治的に果たしてきた役割について考える。

(1)「驚異の部屋」、(2)近代博物館の成立と万国博覧会については、日本展示学会『展示論』2010 年 雄山閣の P22-23 がコンパクトにまとまっている。大堀哲・水嶋栄治編著『博物館学Ⅱ』学文社 2012 年の P29-33 の展示史概説も理解しやすい。驚異の部屋や後述のホワイト・キューブについては博物館展示史や博物館史で必ず扱われる基本事項であり、自分で画像を探してみてもよいかもしれない。川口幸也編著『展示の政治学』水声社 2009 年の P275-305 川口幸也「見せずにはいられない」に詳述がある。ガラスケースを導入したことによる展示物と見学者の認識論的分離については、村田麻里子『思想としてのミュージアム』人文書院 2014 年の P53-83 を参照。当時始まった鉄道旅行との関連付けが驚きである。
アイソレーション・スペースについては『博物館学Ⅱ』の P34-35 を参照。近現代美術館の展示「ホワイト・キューブ」については「見せずにはいられない」の P296-300 を参照。講義レジュメには直接記載しないが、「見せずにはいられない」の末尾では、高級ブランド（セリーヌ、カルチェ、グッチなど）のブティックのディスプレイと、ホワイト・キューブの共通性が説かれていて衝撃的である。こういうハイ・ブランドのショップにいまいち入りにくいとしたら、それはなぜなのか考えてみよう。

(3)博物館展示の政治的効果の①「見る」/「見せる」、②近代博物館展示の思想的基盤と作用については、『展示の政治学』の P103-149 松宮秀治「展示と政治」を参照。さらに詳しく学びたい場合は、松宮秀治『ミュージアムの思想』白水社 2003 年を参照。あるいは上の(2)と(3)①②を合わせた概説としては栗田秀三編著『現代博物館学入門』ミネルヴァ書房 2019 年の P4-14 も参考になる。博物館学業界で以前からよく言われている“市民が主役の博物館”とかいう言葉が実は大ウソ、または恐るべきマジック・ワード、トリック・ワードであることを自覚したい。
③a 民族資料展示における美的展示の分化に関しては『展示の政治学』の P353-386 竹沢尚一郎「文化を展示することは可能か」を参照。学内の民族資料博物館を見る際の、判断基準の一つを習得できるだろう。③b ミュージアムの図書館化に関しては松宮秀治「展示と政治」を参照。さらに詳しく学びたい場合は、梅棹忠夫『メディアとしての博物館』平凡社 1987 年、松宮秀治『ミュージアムの思想』を参照。博物館を情報伝達装置として捉える考え方については、学芸員課程「博物館情報・メディア論」で扱われるであろう。梅棹は博物館を情報機関

として捉えるとともに、劇場のような総合的な演出展示を提唱した、戦後日本博物館展示学の大家である。松宮は『ミュージアムの思想』ではこれを批判的に扱い、「展示と政治」では肯定的に扱っている。大家の言説であっても、仮説、主張の一つであること、これを批判するためには言説が登場した時代背景や思想的基盤にまで遡ってなされるべきであること、その批判もまた、一定の時代背景や思想的基盤によってなされることを副次的に学ぶことができる。

＊本講の事前課題として、受講生にとって印象深いディスプレイ（博物館展示以外）を考え、授業当日に回答する指定している。モノを見せる/見ることの意義、怖さを考え、授業前と授業後で、ディスプレイに対する見方、考え方が少しでも変わってくれるとうれしい。なお、次回授業の冒頭で、匿名形式の一覧表にして配布する。

［第 04 講］調査研究と展示

＊本講は、「博物館展示論」全体の進度調整用の回とする。レジュメは(1)古陶磁狛犬、(2)指定文化財の二部で構成し、ともに事例紹介として陶磁美術館・講師小川における研究と展示のサイクルを概観する内容としている。

「博物館展示論」では、授業内容の一つとして、「調査研究の成果の提示」を扱うことが文化庁より求められている。しかし一言でいえば“学芸員の調査研究の成果を、博物館展示で情報発信する（べきだ）”といった類いのことを、90 分もかけて論じる力は講師小川にはないし、高等教育である大学の講義として必要とも思われない。これはほとんど、ゼミか研究室での雑談－学生にとっては非常に有益だが－において、教師から学生へ調査研究の経験談を語る形で展開されるべきことではないだろうか。
そこで、いちおうは授業資料を作成しておくが、本講は「博物館展示論」全体の進度調整用の回とする。万一どうしても話が聞きたいという人がいたら、要相談だ。これは、稲村哲也編著『新訂博物館展示論』放送大学教育振興会（放送大学教材）2016 年の P11-P12（「展示論とは・展示の構想と具現化－リトルワールド本館展示」の導入部）や、これを踏まえた P32-52「現地調査と展示の具現化－リトルワールド野外展示」ほかで展開される考え方に近い気がする。講師小川の話を聞くよりも、稲村本を読んでリトルワールドに行った方が楽しいし面白いだろう。

＊受講生の居住地に所在する指定文化財（市町村指定、県指定、国指定）のうち任意の一つについて、指定の理由（文化財としての評価）や、所在地での(展示)公開状況について調べてみるとよい（授業後の課題提出不要）。

［第 05 講］展示の政治性と社会性

＊本講では、(1)戦争展示と(2)現代美術展示について扱う。本授業は、講師が受講生に政治的宣伝を行うのではなく、あくまで身近な展示事例の紹介と博物館学上の考察をすることに主眼があることに留意されたい。

(1)戦争展示については、古市憲寿『誰も戦争を教えてくれなかった』講談社 2013 年（後に『誰も戦争を教えられない』講談社 2015 年、改名して文庫化）が網羅的な紀行文として読みやすい。一般的な博物館展示論関連の書籍では、日本国内館の戦争展示はあまり扱われないように思う。黒沢浩『博物館展示論』講談社 2014 年の P7-8 には、アメリカにおけるエノラ･ゲイ展をめぐる問題が紹介されている。講義で事例として挙げた二館は両者が近接、交通至便かつ入館無料なので、両館を連続して見学するとよいだろう。なお愛知平和記念館の展示室画像はネット上に流通しているが、本来該当展示室は撮影禁止である。講義では触れきれないが、ピースあいちも見学ないし公式 web サイトを閲覧すると、日本における戦争展示がより立体的に理解できるようになるだろう。都合が合えば、自衛隊駐屯地の公開イベントで展示を見学できるとさらによい。

(2)現代美術展示については、愛知県公式 web サイト掲載の『「表現の不自由展･その後」に関する調査報告書』(2019 年 12 月 18 日）と同じく「芸術監督からの意見」、「中間報告書に対する不自由展実行委員会からの意見」を底本とし、併せて各新聞報道記事も参照。本件についてはネット上あるいは書籍において様々な意見が表明されているが、まずは事実関係、全体の構造を正確に把握することが必須である。現代美術展示と「表現の自由」、法的問題については『報告書』の別冊資料 2 と 3 に詳しい。別冊資料 3 にある、日本でおきた表現の自由に関わると思われる事象例を自分で調べてみるとよいかもしれない。川口幸也編著『ミュージアムの憂鬱』水声社 2020 年の P13-62 川口「揺さぶられるアートと美術館」、P91-106 鷲田めるろ「顕彰か検証か」が参考になる。

＊本講の事前課題として博物館における宗教展示について考え、授業当日回答するよう指定している。このほか、本講では扱わないが、博物館展示における性的表現作品をめぐる問題もあるので、こちらも事例などを調べてみるとよい。

［第 06 講］展示の諸形態

＊本講では、(1)代表的な分類基準と類型と(2)専門分野別分類について扱う。様々な展示を見て、考える際の基礎的なチェック･ポイントについて確認する。博物館の展示を見学して、リポートする場合、まずは本講の内容が基本的な事項で、出発点となるものである。

(1)代表的な分類基準と類型については、加藤有次ほか編著『博物館展示法』雄山閣 2000 年

の P31-73 をベースとしつつ、里見親幸『博物館展示の理論と実践』同成社 2014 年の P14-20 を参照。ただし、項目の掲載順序は本講独自のものとしている。講義内容は多項目にわたるが、博物館の展示を見て、展示の形態を把握するとは、これらの項目に基づいて展示全体を分析的に理解することにほかならない。提示型展示と説示型展示、概説展示と収蔵展示ー二元展示は特に重要な概念である。

(2)専門分野別分類については、大堀哲・水嶋栄治編著『博物館学Ⅱ』学文社 2012 年の P51-94、『博物館展示法』の P159-254 を参照。しかし、言うまでもないが、各分野の博物館に行ったことがなければ、これらについて実感的に理解することは不可能である。名古屋近郊では、歴史民俗系であれば名古屋市博物館、一宮市博物館、刈谷市歴史博物館、安城市歴史博物館など、美術館では徳川美術館、愛知県美術館、名古屋市美術館、豊田市美術館など、自然史や理工系では名古屋市科学館や産業技術記念館、トヨタ博物館など、動植物系では東山動植物園や名古屋港水族館など、野外系では明治村、リトルワールドなどが、施設規模が大きく内容要素が豊富だ。各分野の特徴をつかむとともに、大規模館と小規模館、老舗館と新設館を比較分析する視点も必要である。公共交通機関では行きにくいが、鳳来寺山自然科学博物館と奥三河郷土館もお勧めだ。

＊第 1 講の事前課題は、受講生自身の博物館展示体験についての主観的、感想的なアンケートであった。これに対して本講の(事前)課題は、受講生自身の博物館展示体験について、博物館展示論的用語を使って説明することを指定している。こうしたツールを使って現実を捉えられるようになることが、大学教育上の訓練課題の一つである。

［第 07 講］展示の制作Ⅰ

＊本講では、企画展示の(1)企画と(2)計画について、考え方と実務の基本を確認する。企画展示を企画構想する際、あるいは企画展示を博物館展示論的に見学する際に、絶対に押さえるべき基本的な事項である。

(1)企画、(2)計画ともに、佐々木晃彦監修『芸術経営学講座①美術編』東海大学出版会 1994 年の P41-76 竹内順一「美術館の運営」と、木下周一『ミュージアムの学びをデザインする』ぎょうせい 2009 年の P202-213 をベースとした。ちなみに「美術館の運営」は、講師小川が学芸員として就職した際、当時の上司から渡された文献である。学芸員養成課程用に制作された一般的な博物館展示論の文献では、常設展示の企画・計画については詳述されるが、企画展示については論じられないものが見受けられる。しかし、学芸員の実務においては、常設展の制作と企画展の制作は全く別モノといってもよいものなのである。本博物館展示論においては、よりコンパクトな期間限定展示である企画展について先に本講で論じ、数年以上のスパンで開催される常設展示の制作については第 10 講「計画と評価」で講じることとし

た。なお、常設展示の制作と企画展示の制作を並立的に紹介する稀な文献としては、栗田秀法編著『現代博物館学入門』ミネルヴァ書房 2019 年の P135-159（「第 5 章 展示論」の 1 と 2）がある。
学芸員課程の授業（実習も含む）において、授業課題として学生が展示を企画するといった場合、多くは本格的な企画展の立案演習を指す。本講では、企画展示の企画・計画の考え方を踏えつつ、企画展示の企画書である開催要項のフォーマットについて理解すること。博物館学芸員の世界では、まともな開催要項が書けるかどうかが、学芸員としての力量を判断する基準の一つとなっているのだ。

＊本講の事前課題としてミニ企画展示の立案を指定している。本講では、授業で開催要項について扱うが、本講授業後の提出に際しては開催要項のフォーマットに依拠せず、単純に展示タイトルとテーマ、大まかな内容を挙げるだけでよい。次回授業の冒頭で、匿名形式の一覧表にして配布する。なお、現地の展示ケースは左側と右側の二つに分かれているが、本課題の設定としては、右側のみを使い、左側は図書館ないし民族資料博物館の案内展示を行うこととする。

［第 08 講］展示の制作Ⅱ
＊本講では、企画展示を開催するために必要な実務に関して、(1)借用・運搬、(2)印刷物、(3)展示工事、(4)展示作業、(5)管理・運営について概観する。企画展示を準備するプロセスや、様々な関係者について確認する。

(1)-(5)については、前講で挙げた佐々木晃彦監修『芸術経営学講座①美術編』東海大学出版会　1994 年の P41-76 竹内順一「美術館の運営」と、木下周一『ミュージアムの学びをデザインする』ぎょうせい　2009 年の P202-213 を参照できる。ただし、この辺りは講師小川の実務経験を紹介する要素が多くなってしまうだろう。**(6)教育・普及事業、(7)広報・宣伝活動**も、企画展示の必須要素として一体的に捉える必要があるが、詳細については学芸員課程では「博物館教育論」などで講じられるべき事項であり、本講では詳述しない。また、実務上必須となる財務、特に予算については、詳細は「博物館経営論」に委ねたい。

「博物館展示論」では、授業内容の一つとして、本講に関しては「展示の制作」：企画・デザイン・技術・施工、「関係者との協力」：他館・所蔵者・専門業者等を扱うことが求められている。本講義では、学芸員一人で開催できるものではなく、様々な関係者との計画的な協働によって成立するものであることを理解すること（学生サークル活動とかでも同じこととは思うが）。
本「博物館展示論」の教育目標や学生課題として、本格的な企画展示の立案演習を行うかどうかは判断に迷うところだ。選択としては、どちらでも成り立つ。本授業では、展示を読み

解く能力の育成－眼に見えるものの構造的な把握や、その背景にある考え方を探る思考の訓練を優先するため、本格的な企画展示の立案演習については、「博物館実習」など他授業に委ねることとした。

＊本講の事前課題として、前講に引き続きミニ企画展示の立案を指定している。本講では授業終了後に、開催要項のフォーマットに則った、ミニ企画展示の案を提出すること。次回授業の冒頭で、全受講生の提出資料を匿名状態にして配布し、そのうち一部について講評する予定である。

［第 09 講］展示の技術

＊本講では、博物館展示を行う際に必要な、各種の技術について概観する。マニュアル的な説明よりも、業務上に必要な技術の体系的と、基本的な考え方を理解することを優先する。これらは、展示を見学する際の、博物館展示論的な現場のチェックポイントとなる事項群である。

(1)**構成デザイン**については、木下周一『ミュージアムの学びをデザインする』ぎょうせい 2009 年の P202-213 を参照。展示を構成するとは、テーマ･メッセージを伝えるために、展示資料・展示情報を体系化すること。展示ストーリー/展示シナリオを作成するとは、展示構成を展示空間に表現すること。学芸員の展覧会関連業務の中で、最もやりがいのある仕事かもしれない。

(2)**環境管理**、(3)**照明**については、里見親幸『博物館展示の理論と実践』同成社 2014 年で詳述されているのが参考になるが、同書は全編モノクロなのが玉に瑕。その点、黒沢浩『博物館展示論』講談社 2014 年は全編カラーで、コンパクトにまとまっていて理解しやすい。環境管理については P51-62、照明については P63-72 を参照。照明については、いくつかの美術館展示室で、光による演出状況を見ておくとよいだろう。

(4)**展示什器**については、『博物館展示の理論と実践』P82-90、『博物館展示論』P73-78 を参照。特に展示ケースは、歴史民俗系博物館や工芸系美術館の展示室では必須アイテムであり、その分類と構造を把握することが、展示技術理解の基礎となる。特に近年開館した博物館では、最新技術を駆使した展示ケースが導入されており、展示見学の際に注視するとよい。

(5)**サイン･解説**については、第 12 講「サイン･解説」で講じる。

＊本講の事前課題として、本学民族資料博物館を、特に展示技術に注目して見学するよう指定している。本講では、受講生が見学済みであることを前提に授業を進める。ただし、本課

題については、授業後の回答等提出を特に求めない（各自の見学成果をコミュニケーション･ペーパーへ記入すること自体は自由である)。なお、本講で扱う内容については、本科目最終第 15 講において、現地で受講生全員と共に振り返りつつまとめとすることを構想している。

［第 10 講］計画と評価

＊本講では、博物館の常設展を中心とした計画と評価について講じる。主に公立博物館(展示)を中心とした行政計画の体系や、博物館展示－企画展示も含む－の改善のための各種評価について論じる。

(1)展示計画①行政計画については、実は特に決定版が思い当たらないが、博物館が社会教育施設であることから連想して、国立教育政策研究所社会教育実践研究センターの公式 web サイトにハンドブックなどが pdf 掲載されていて、基本を学ぶことができる。博物館における行政計画の問題点については、太下義之「ミュージアムの終活(または再生)」ウェブ版美術手帖 2021 年のうち「「毒まんじゅう」だった New Public Management」で指摘がある。②展示計画については、里見親幸『博物館展示の理論と実践』同成社 2014 年の P66-70 を参照。常設展示の制作は数年単位で準備を進め、完成後数年は継続していくもので、短期決戦の企画展示とは違って長いスパンで考える必要がある。

(2)展示評価については、学芸員課程博物館展示論業界で一般的となっているゴール･レファレンス法をまず概観する。これについては『博物館展示の理論と実践』の P187-195 を参照。ただし、ここでは観覧者人数や観覧料収入について全く論じられていない。博物館事業における評価については学芸員課程「博物館経営論」でも扱われることと思うが、現実の博物館世界では、定量的評価と定性的評価との両方によって事業評価を行うのが一般的である。例えば本学民族資料博物館の自己点検･評価シート(本学公式 web サイト-情報公開-自己点検･評価-2018 年度-D 群の P49-53)で展開される事業評価にも言及がある。
レジュメ終結部では、佐々木晃彦監修『芸術経営学講座①美術編』東海大学出版会 1994 年の P41-76 竹内順一「美術館の運営」で挙げられた企画展評価の観点、フィリップ・コトラー＋二―ル・コトラー『ミュージアム・マーケティング』1998、邦訳は第一法規 2006 年の邦訳 P45 掲載のミュージアム体験を紹介し、博物館展示評価の観点をさらに考えることとした。
博物館展示の評価とは何か。よい展示とは何か。その答えに唯一絶対のものはない。複数の観点を用いて、複眼的、多角的に展示を捉えることができるようになること。自分の考える理想像から外れているからといって、これはダメ展示だといって断罪しても、建設的ではない。自分がダメだと思った展示であっても、企画者には一定の意図があり、これを受け入れる観覧者もいるのだ。展示の意図と目的を考え、その目的を達成するには、こうしたらもっ

と良くなるのにと考えた方が、気分がよいのではないだろうか。博物館展示論で学ぶ諸々の知識は、そのためのツールである。こうした物事の捉え方、考え方こそを、この博物館展示論で学びとってほしい。

＊本講では、本科目「博物館教育論」の中間まとめとして、第 1 講以降これまでの授業内容に対する各自の振り返りと質問作成を指定している。授業内容に対する感想や意見、レポートに関する質問ではなく、第 1 講以降これまでの授業内容に対する質問を必ず一つ準備して授業当日に提出すること（ただし、レポートに関する質問は、別途自由にしてよい）。質問をつくることによって、何を問うのか、授業のどこを尋ねるのかという、みなさんの着眼と個性、志向、授業の理解度が問われていることにご留意ください。本件については、森博嗣『大学の話をしましょうか』中央公論社（中公新書）2005 年を参考としている。

［第 11 講］展示の解説活動

＊本講では、(1)基本設定、(2)広義の「博物館教育」の諸問題、(3)展示解説の方法を扱う。教育活動の一部としての展示について考えるため、博物館をめぐる教育について確認するとともに、展示の解説活動について体系的に把握する。

(1)基本設定、(2)広義の「博物館教育」の諸問題では、学芸員課程の「生涯学習概論」、「博物館概論」、「博物館教育論」で学習する関連事項の再確認を行う。具体的には学校教育と社会教育、博物館(教育)の違いと共通性、社会教育(史)における博物館(教育)の位置付け、博物館における教育と展示の位置付けを確認する。他の授業で扱われた同じ事項について、本講では違う解釈をする可能性がある（例えば、教育における博物館の位置付け、博物館における教育の位置付けや呼称、特徴)。そのため受講生は若干面食らい、混乱するかもしれない。中等教育までの教科学習とは異なり、高等教育や研究機関での教育と研究には、様々な所説が成り立つということを理解してほしい。博物館学研究者業界の定説を知るための入門書としては、伊藤寿朗『市民の中の博物館』吉川弘文館 1993 年が対話形式で読みやすい。しかし、同書はまさに対話形式のためか、内容について疑念を持ちにくい（ボケとツッコミが本の中でずっと展開されているので、読者が第三者的にツッコミをいれにくいのだ)。伊藤本のワクチンとしては、犬塚康博『反博物館論序説』共同文化社 2015 年が有効だが、講師小川としては犬塚本の結論にも同意はしていない。

(3)展示解説の方法については、概要については黒沢浩『博物館展示論』P96-102 がコンパクトにまとまっている。「博物館展示論」では、授業内容の一つとして、本項に関しては「解説文・解説パネル」(第 12 講)、「展示解説書」(第 14 講)のほか、「人による解説」と「機器による解説」を扱うことが文化庁より求められている。しかし後二者については、本「博物館展示論」では詳述を省くこととした（『博物館展示論』の P103-120 で概要を知ることはできる)。

大学教育として、展示解説の方法を体系的に把握することは必要だが、人と機器による解説の詳論は、大学教育としては些末で技術論に偏り過ぎると思われるためである。もちろん、展示室におけるスタッフの解説や、音声ガイド、スマホ･アプリによる解説などは、現場で体験しておくに越したことはない。

＊本講の事前課題として、人か機器による解説を受けた体験について振り返り、授業終了後に回答することを指定している。講義では詳述を省略する代わりに、受講生の体験概要を全員で共有してみんなで視野を広げることをねらいとしている。これは面白い！というような事例が集まるとうれしい。

［第 12 講］サイン･解説

＊本講では、展示室に設置するパネル、キャプションを中心とした展示グラフィックについて講じる。展示グラフィックの考え方とテクニックを学び、見やすく、読みやすく、解りやすく、きれいで楽しい、学びの意欲につながるデザインの基本を習得する。

＊展示グラフィックの考え方、(1)サイン･解説の基本構成については、黒沢浩『博物館展示論』講談社　2014 年の P79-81 がコンパクトにまとまっている。詳細は木下周一『ミュージアムの学びをデザインする』ぎょうせい　2009 年の P212-221 を参照。ファッションやデザインとは、個人のセンス、感覚ではなく、知識と技術であることを想起してほしい。

(2)フォーマット･デザインについては、『博物館展示論』P82-88 がコンパクトにまとまっている。詳細は『ミュージアムの学びをデザインする』の P15-29、P1-11 を参照。展示パネル、キャプションの事例は特に後者で多く紹介されているが、言うまでもなく自分で様々な展示を見て、現地でパネル、キャプションを視覚的に体験することが、デザイン理解の出発点である。その際にはパネル、キャプションの形・サイズ・場所、文字数・文体・内容、フォントの種類・字間・行間・一行あたり文字数、色彩に注意して観察すること。

(3)人間工学上の基礎知識のうち①視点と視覚対象については『ミュージアムの学びをデザインする』の P220-221、②色彩については、『同』P184-194 を参照。人間工学上の知見は、人間を相手にする現場実務の前提情報として、当然に知っておくべき事柄である。例えば看護学生のテキスト基礎看護学においても同様に、人間工学上の基礎知識が記載されている。

＊本講の事前課題として、本学民族資料博物館を事前に見学し、印象に残ったパネルやキャプションを一つスケッチして提出するよう指定している。館内のどのコーナ、どのような内容の展示に設置してあるのか、なぜ、そのパネル・キャプションを選んだのか、優れていると思われる点もしくは改善すべきと考えられる点を簡潔に書き添えること。

［第 13 講］展示解説書Ⅰ

＊本講では、(1)ワークシート、(2)展示解説シートについて扱う。どちらも、一般には展示室で配布している学習ツールである（博物館受付で配布だったり、事前の pdf ダウンロードー自分で出力して持参だったりすることもあるが)。本講では特に前者について考え方と企画、制作のポイントを確認する。

(1)ワークシートについては、木下周一『ミュージアムの学びをデザインする』ぎょうせい 2009 年の P75-142 を参照。該当頁数が多すぎるが、P75 の概説を読み、以降に載っているたくさんのサンプルを見るだけでも参考になる。ワークシートは博物館展示における主体的な学習を支援するための有力ツールであり、その考え方を把握することは、生涯教育ー生涯学習社会における博物館事業の在り方を考える上で有益である。

(2)展示解説シートについては、『ミュージアムの学びをデザインする』の P31-62 を参照。ただし、本講ではワークシートに重点をおくため、解説シートについてはゴミ箱直行にならないための注意点など概略にとどめる。どちらにしても、受講者自身が様々な博物館でワークシート、解説シートを入手し、現地で利用してみると、より体験的に理解が深まるに違いない。本講は、その際のチェックポイント、ツッコミどころを指し示すものである。その上で、自分だったら、どういうワークシート、解説シートを作るかを考えてみるのもよいかもしれない。

＊本講の事前課題として、＊＊＊博物館の公式 web サイトでワークシートを閲覧することを指定している。授業日が近づいた段階で、サイトの状況を確認した上で、受講生に閲覧サイトを指定する予定である（いちおう現在は、名古屋市博物館常設展示のワークシートを予定している)。授業当日には講師が該当ワークシートのうち一つを出力、配布する予定である。特に強制はしないが、どこか任意の博物館（ワークシートがある館）に行って、実際に展示室でワークシートを使ってみると、より実感的に理解が深まること間違いなしである。

［第 14 講］展示解説書Ⅱ

＊本講は、「博物館展示論」全体の進度調整用の回とする。レジュメは展示図録ー展覧会カタログについて扱い、レジュメは(1)考え方、(2)制作をメインとする二部構成とし、補論として(3)ミュージアムにおける出版マーケティングに触れる。展示図録制作の考え方と実際について学び、展示図録の読み方眺め方を習得できるようにしたい。

(1)考え方については、黒沢浩編著『博物館展示論』講談社 2014 年の P128-129 と P133、今橋映子編著『展覧会カタログの愉しみ』東京大学出版会　2003 年の P1-9 を参照。展示図録

は、「本」ではあるが、「書籍」ではない。展示図録の基本的な性格と、法的な位置付け及び課題を確認する。美術館の企画展示図録と、歴史民俗系博物館の企画展示図録を、各自で読んで眺めて比べて見て、特徴をつかむ経験が必須だ。著作権やドキュメンテーションについては「博物館情報・メディア論」で取り扱われるべき事項であり、詳細はそちらで学習してほしい。

(2)制作については、概要は『博物館展示論』の P129-133 を参照。もっとも、これらは実際には学校授業での勉強ではなく、職場の業務の中で習得していくような事柄である。サークル活動等でも経験はできるかもしれない。マニュアルではないが、読み物としては佐々木晃彦監修『芸術経営学講座①美術編』東海大学出版会 1994 年の P41-76 竹内順一「美術館の運営」が読んで楽しいし、実務上も参考にもなる。印刷物や web のレイアウト・デザインの知識や、校正のやり方ー校正紙に赤ペンで訂正を記入する時の、表記上の約束事、さらには色校正の指示方法を習得するのも必要である。こういった知識・技能がないと、デザイナーや印刷業者と円滑に仕事を進めるのが困難となる。しかし、これはコミュニケーション学科で行われる専門教育の領域かもしれない。

(3)ミュージアムにおける出版物マーケティングについては、フィリップ・コトラー＋二―ル・コトラー『ミュージアム・マーケティング』1998、邦訳は第一法規 2006 年の邦訳 P261-295 を参照。マーケティングについては「博物館経営論」で取り扱われるべき事項であり、詳細はそちらで学習してほしい。

＊美術館の企画展示図録と、歴史民俗系博物館の企画展示図録を、各自で読んで眺めて比べて見て、特徴をつかむこと（授業後の課題提出不要）。

［第 15 講］展示を見る

＊本講では、近年展開されている、大学博物館についての基本的な考え方について確認するとともに、本学民族資料博物館を博物館展示論的に見学する際のチェックポイントについて触れる。本「博物館展示論」のまとめとして、同館見学により実施する。

(1)考え方については、中京大学先端科学共同研究機構文化科学研究所博物館研究プロジェクト『大学教育と博物館』2021 年の P131-162 を参照。本書は中京大学で文化人類学等を専門とする教員が中心となって執筆されたもの。本学との共通点と違いについても間接的によく分かり、教学の参考になる。学芸員養成課程をめぐる近年の動向、課題については、法政大学資格課程『大学における学芸員養成を展望する』2015 年や、みずほ総合研究所『令和元年度「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」における「博物館の機能強化に関する調査」事業報告書』2020 年が参考になる。

(2)博物館展示論的見学のてびきについては、本科目での学びの内容を、実際の展示室で確認していく。この学びの目的は重層的である。直接的な目的は上記の通りであるが、間接的には学期末レポートの執筆に向けた説明も含まれる。さらなる大目的は、現地で情報を読み取り、各自が本授業で習得した知識と結びつけて解釈、評価する能力の育成である。こうした調査と分析、考察を経て、モノを並べて見せる/見ることの意義を考えるための知的基盤が構築できれば、本科目の目的は達成されたこととなる。

＊本講の事前課題として、本学民族資料博物館の公式 web サイトと、同サイトに掲載されている「年報」を閲覧して、館の概要と常設展の動向を把握しておくことを指定している（授業後の課題提出不要）。特定のミュージアムの事業、展示の特徴を捉えるには、そのミュージアムの成り立ちと設置の目的、展示構成の要点や変遷を把握するのが有効である。こうした文献調査や現地調査ー「テキストを丁寧になぞる訓練」（芦田宏直『シラバス論』晶文社 2019 年の P164）を経てはじめて、単なる個人の主観的な感想を超えた、事物の本質的な理解が可能となるだろう。

第Ⅱ部 実施と評価

4 実施

4-1 概況

2022 年度、2023 年度ともに、全授業を教室において対面形式で実施した（10 号館 1011 講義室：定員 102 人）。履修登録者数は 2022 年度：50 人、2023 年度：44 人であった。

授業及び課題の実施進行状況については、本稿末尾に資料として掲載している。2022 年度、2023 年度ともに休講することなく、それぞれ全 15 回の授業を実施したが、計画通りの授業及び事前課題提出を行うことはできなかった。第 1 回授業をシラバス上の第 1 講ではなく本講オリエンテーションとしたことや、2022 年度第 14 回、2023 年度第 13 回をレポート対策授業としたことで、第 15 回に第 14 講、第 15 講及び第 04 講を概述することとなった。

また、シラバスにおいて事前課題（授業外学習）として設定した課題のほかに、講師と学生間あるいは学生同士における情報共有のための質問や、授業当日の内容に基づく課題を臨時に設定して授業終了直後に提出とした回もあった。

レジュメ及び参考資料は、基本的に教室において紙形式での配布とした。プレゼンテーションソフト「PowerPoint」は用いず、画像教材の投影も行わなかった。学生からの課題及び質問の提出も、基本的に紙形式である。本学では教学支援システム「Tora-Net Portal」、授業支援システム「CoursePower」が運用されているが、本講ではメールや一部の教材登録の利用にとどめ、グループワークやクリッカー機能は用いなかった。

受講生からの質問は、毎回コミュニケーション･ペーパーへの自由記入により受け付けた。次回授業において全質問の一覧を紙形式で配布し、口頭または紙面で回答した。講師から受講生への問いかけは授業内に随時行ったが、質疑応答は授業内では行わなかった。講師と受講生との質疑応答は上述のペーパーによるものが主であったが、一部では授業終了後に教室での直接対面あるいはメールによっても行った。

4-2 受講生の提出課題

4-2-1 企画展示案の作成

シラバスにおいて事前課題（授業外学習）として設定した提出課題のうち、特に本講にとって重要な位置を占めているのが、企画展示案の作成と、授業全体への総括的な質問である。

企画展示案の作成は、「本学附属三浦記念図書館 1 階エントランスホール壁面展示ケース(右側のみ)を使ったミニ企画展示を企画構想する」もので、第 07･08 講「展示の制作」に関連した課題である。壁面展示ケースのサイズは、内寸で幅 5,510、高 1,610、奥行 350㎜である。受講生は先ず、展示テーマや展示タイトル、おおよその展示内容についてコミュニケーション･ペーパーにより提出。講師は受講生全員の提出課題（全て匿名）とこれら課題に対する講師の各講評を配布した。講評は、展示を通じて伝えたいことを、より効果的に視覚化して発信するために、どのような選択肢が考えられるかという観点で行った。また情報伝達の精度を上げるために、展示メッセージの焦点化あるいは展示構成デザインの編集を提案し、総体的には大学（図書館）施設での開催にふさわしい展示テーマや構成内容となるよう個別指導（文書回答）を行った。

その後、受講生は企画展示案の開催要項（企画書）を A4 サイズ用紙（縦）2 ページの形式で作成した。講師は受講生全員の提出課題とこれら課題に対する講師の各講評を配布した（希望者のみ実名）。講評においては、展示の趣旨、会期、開催関係者、構成について確認の上、全体として展示メッセージ伝達の精度を上げるための改善点を提案するとともに、企画提案書としてのデザインについて個別指導（文書回答）を行った。

受講生が作成した企画展示案は、所属学科の専門分野に関する事項、大学のキャンパスや各種事業、学生サークル活動に関連するものなどで、分野は世界史、日本史、民俗、言語、理工、文学、美術、メディア芸術、生活文化、地誌･工芸、スポーツ、自然史、環境保全、動植物と多岐に渡り、さながら文理融合の総合博物館的な様相を呈した。受講生は展示企画案の作成と講師講評を通じて、実物資料を用いた視覚的なコミュニケーションの在り方や、個人の単眼的な主観によらない、複眼的な事業評価の方法について、経験的に学ぶことができたと思われる。

4-2-2 授業全体への総括的な質問

総括的な質問は、シラバスでは「第 01 講から第 10 講までの内容に関連して、一人一つ質問を提出すること」とした課題である。実際には 2022 年度では第 13 回終了後、2023 年度

では第 12 回終了後に提出し、次回授業で回答している。

質問内容は、質問提出日の授業内容に関連した技術的な事項から、展示の企画、構成、開催、展示技術、展示の解説、さらには展示の人文的、社会的作用にまで渡り多種多様であった。本講を通じた受講生の理解内容や興味関心の所在、授業において講師説明が不足していた事項を知ることが出来る。2022 年度受講生質問及び講師回答については、本稿末尾に資料として掲載している。

質問を考えること、すなわち「問う」ことは、受講生たる学生が、教えられる存在から学ぶ存在へと自己を転換するために有効な教育手段であると考える。大学教育においては、受講学生からの質問と講師回答を授業の中心に位置づけている事例がかねてから知られる。近年では、いわゆるリベラルアーツ教育においても、「問い」が教育要素として重要な役割を果たしている。

本講における質問課題は、博物館科目の知識、技能理解にとどまらず、学校教育の最終段階である大学において、生涯教育（生涯学習）の学習主体として自己を形成し、生涯にわたり学び続ける姿勢と力を培うために寄与しているものと思われる。すなわち、本講は専門基礎教養科目として機能し、本学におけるリベラルアーツ教育の一端と担っているといえよう。

なお、毎授業後においても授業内容及び課題等について質問を受け付け、次回授業で回答していた。特に授業初期では学芸員職への質問などもおおく、講師としては興味深かったが、本稿では掲載省略。

4-2-3 学期末レポート

レポート課題は、本学民族資料博物館及び愛知県陶磁美術館以外の、任意のミュージアムへ行き常設展示を見学した上で、該当館の博物館展示事業及び、その常設展示のうち一つの概要、並びに特徴的なパネル･キャプションについて論じることである（本稿末尾に資料掲載）。

学生が対象として選択した館園は、主に東海地方に所在する歴史･考古･民族/民俗、美術、自然史、理工、動物･水族･植物や総合博物館であった。本学とメンバーズシップ契約を締結し、かつ本学と同一の JR 沿線（中央本線）に立地する「徳川美術館」を対象とした受講生がおおく見られたほかは、各自の専攻分野や自宅所在地に応じてレポート館を選択したと思われた。

レポートの文字数やページ数は特に指定しなかったが、全体として FS（環境生物学科）の受講生が提出したレポートのページ数は、HH（歴史地理学科）など他学科受講生に比べて二倍以上ある傾向にあり、学部学科によってレポート作成文化等に差異があることが窺えた（これは、レポートの構成内容や成績評価の分布とも関連していると思われるが、本稿では省略）。

5 評価

5-1 成績評価

成績評価は学期末レポートのみにより、以下に基づき行った。

学期末レポートの提出がなかったものは、「E」(不合格)。本講で扱った博物館展示の基本用語（「提示型展示」など）が全くまたはほとんど用いられていないものは「C」(60 点～69 点)。基本用語を用いているが、何等かの瑕疵があるもの（課題要素が不足、解釈の間違いなど）は「B」(70 点～79 点)。全ての課題要素について、事実報告と基本用語を用いた分析考察を行い、改善点の提示まで行ったものは「A」(80 点～89 点)。なお、事実報告の記載状況を中心に、A、B、C のそれぞれにおいて三段階評価を行った（A＋、A、A－、B＋、B、B－、C＋、C、C－)。また、「A＋」のうち特にレポート構成の完成度が高いものを「S」(90 点以上)とした。

2022 年度は、S：1 人、A：19 人、B：14 人、C：14 人、E：2 人であった。学期末レポートでは、授業及び課題内容の理解が十分ではない受講生が一部見受けられた。こうした受講生にとっては、そもそも授業内容自体が十分なものではなかったと思われたため、2023 年度は課題内容確認を徹底することとした。

2023 年度は、S：0 人、A：19 人、B：17 人、C：3 人、E：5 人であった。2022 年度に比べて C が大幅に減少したことは成果の一つであった。一方、A は 2022 年度と同数であるが、レポートの構成内容としては 2022 年度より完成度が低いものが多いため、「A＋」と評価したものはなく、S を選出することはできなかった。

5-2 受講生による本講の評価

本学では FD（Faculty Development）活動、魅力ある授業づくりのために、学生による授業評価と教員自己評価を科目別に実施している。本講では、2022 年度は履修登録生 50 人に対して回答者数は 10 人、2023 年度は最終登録生 43 人に対して回答は 12 人であった。学芸員課程では全般に授業評価の回答率が低いが、他科目も含めた集計結果と比較することで、おおよその状況を知ることができる。

授業評価のための設問は 1：教員の伝え方、2：授業毎の主題明示、3：シラバス通りの授業実施、4：教員の熱意、5：理解させるための手段工夫、6：学生反応への対応、7：授業内容の理解、8：授業の魅力。授業評価外の、学生自身についての設問として A：授業時間外の学習、B：授業への取組意欲が設定されている。

評価は a：そう思う、b：どちらかといえばそう思う、c：どちらともいえない、d：どちらかといえばそう思わない、e：そう思わないの 5 段階選択によって行われ、それぞれ a-5、b-4、c-3、d-2、e-1 に点数換算して集計される。

2022 年度の本講評価において、学芸員課程科目の平均値よりも下回った項目は 4：教員の熱意と B：授業への取組意欲であった（例えば設問 4 では平均値：4.10 に対して、本講：4.0)。平均値とほぼ同じ値となった項目が多いが、1、2、5、8 では平均値を上回った（例え

ば設問 5 では平均値 3.76 に対して、本講 4.2)。

一方、2023 年度は、全項目において平均値を下回った。ただし、絶対値は 2022 年度を上回っており、例えば設問 4 では平均値：4.55 に対して本講 4.33、設問 5 では平均値：4.39 に対して本講：4.25 であった。また、2022 年度は全設問においてｄまたはｅとする評価があったが、2023 年度は設問 7 にｄがあったのみで、その他の評価はａからｃの範囲に分布している。学芸員課程科目内において本科目の相対評価は低下したが、絶対評価は向上している。

5-3 本講の総合的評価

本講の具体的達成目標－博物館展示を企画･計画、実施するために必要な知識･技術や、その背景となる理論を用いて、既存の博物館展示の構造と要素をトータルで把握して分析し、その機能や意義を総合的に考察することができる－については、学期末レポートを対象とした成績評価でＢ以上であった学生においては、概ね達成できたと思われる。

本科目のねらい－博物館展示に関する理論及び知識･技術、展示機能に関する基礎的能力の習得や、本学教学における「身につく基礎力」として設定されている、「クリティカル思考力」及び「自己理解力」の習得については、本講における各種提出課題－授業関連質問･回答や企画展開催要項案の作成などによって、各授業出席及び課題提出学生においては概ね達成できたと思われる。

本学学芸員課程における本講の目的･目標は、モノを並べて見せる／見ることの意義を考える知的基盤の構築であり、本講の最終的な目的･目標は、文化的な情報デザイン力の育成と、これを通じた知性の向上、教養の形成である。本講は「専門基礎教育か専門教養教育か（専門職養成か理解者養成か)」といった二項対立を超え、主体的な学びに取り組む学生に対する、知的オリエンテーションとして、二項同体の教育を実践した。

一方、本「博物館展示論」と同学年･同学期には、「博物館資料保存論」「博物館教育論」「博物館情報･メディア論」も開講していた。これらの他科目で行われた資料関連実習、展示見学や、学生提出課題など、シラバスからは具体的に窺い知ることができない授業実践については、十分な連携を行うことが出来なかった。今後、より効果的な教育実践を展開するためには、少なくとも学芸員課程内における各授業の実施実態について、情報共有を進める必要がある。

博物館展示は、実物資料に対する多義的な解釈とその共有を促す視覚的装置であり、今日のリベラルアーツ教育の一端を担うことができる。本講はその博物館展示に関する理論と知識･技術について多様な視点を学生に提示し、課題作成等を通じて知識の再構成を促した。授業時間中の直接対話や議論を行わない形式ではあったが、今日の大学教育におけるリベラルアーツ教育の実践としても位置付けることができるだろう。

一方で、リベラルアーツ教育としては博物館哲学の試み－例えば、なぜ本物を展示するのかといった問いによって、各自が博物館展示の意義を理論的に考察できるような教育実践

が必要だろう。また、「博物館三世代論」（伊藤寿朗）をはじめとする発達史観的な展示論のみならず、「なんでも博物館」（広瀬鎮）のような多元的展示論を合わせて概観し、我が国にける展示史と展示論史を関連付けて講ずることによって、受講生が博物館展示の多様な在り方を自ら考えることができるようにしたい。

おわりに

6 学芸員養成教育の位置付けに関する一考察

大学における学芸員養成課程に関しては 2018 年 3 月、科研費基盤研究の成果として「博物館学芸員課程における学びの特徴と現代社会に対応した学芸員養成教育に関する研究」が報告された。また、2019 年度には文化庁によって「博物館の機能強化に関する調査」が行われ、大学における学芸員養成課程に関する大学等への調査結果が報告されている。

一方、2019 年には国の文化審議会に博物館部会が新たに設置されて、博物館に関する全体的な議論が行われることとなった。学芸員制度については、特に第 1 期第 3 回（2020 年 1 月 17 日）、第 2 期第 3 回（2020 年 9 月 3 日）で集中的に議論が行われたが、2021 年 12 月の答申「博物館法制度の今後の在り方について」では継続的な検討事項とされ、第 4 期第 3 回（2022 年 7 月 29 日）でも議論が展開されている。

これらの調査や議論では、現行制度において理念上は専門職養成とされている学芸員養成課程が、実態としては依然として理解者養成教育となっていることが話題となっている。また、2022 年の博物館法改正への対応を踏まえた学芸員養成の必要性も議論され、現代の各種社会的課題への対応、標準的なカリキュラムの開発、実習の重視や拡充が提議されている。こうした動向を受けて、2022 年度から文化庁における学芸員の研修体系が改定された。総体としては、大学における養成教育（理解者養成）と博物館への採用後の研修（専門職養成）を分化、あるいは連続的にとらえつつ、ともに実践的な要素を強化する方向を目指しているようである。

学芸員養成課程に先行して改正された教員養成課程では、教員の資質と能力向上を図るために、養成と採用、研修を一体的に改革し、教職課程コアカリキュラムの策定や課程認定、教職大学院を中心とした実務家教員の積極的な配置が進行している。こうした先行事例を参考として、学芸員課程も改正されるのであろうか。しかしながら、先般の教職課程改正に対しては、大学教育においては学校現場で直ぐに習得できるような実践的な事項や教員の体験談ではなく、大学教育ならではの理論的、体系的な教育学の知見を伝えるべきではないかとする批判も聞かれる。学芸員課程の改正に際しては、こうした批判的意見も参照する必要があるのではないだろうか。

今日の大学においては、アドミッション･ポリシー（入学者受入れの方針）、ディプロマ･ポリシー（卒業認定学位授与の方針）、カリキュラム･ポリシー（教育課程の編成･実施の方針）の策定が義務付けられており、学士課程においては学部学科毎にこれらが策定されてい

るが、資格課程においてこれらのポリシーを明確に策定している大学は少ないように見受けられる。しかしながら、現実として、学士課程における博物館科目は、専門基礎教養科目かつ専門教養教育として行われており、さらには資格取得者のごく一部しか博物館学芸員として採用されず、文化財行政や文化芸術行政部署への配属者も極めて少ない現状を踏まえると、各大学においては、学芸員課程教育によって育成する普遍的で汎用性のある能力や、実現を目指す人物像を三ポリシーとして設定することが望ましいのではないだろうか。あるいは学芸員養成課程を、博物館に関する科目すなわち指定必修科目のみで構成する「副専攻」として位置付けることも有効かもしれない。

学士課程の学芸員養成課程においては、近年の理論的博物館学及び博物館社会学的な知見に関する概説や、これらの基盤となる基礎的文献（クシシトフ・ポミアン『コレクション』や多木浩二『「もの」の詩学』、Z.Z.ストランスキー『博物館学：研究序論』など）の講読ないし解説が不足しているように思える。こうした事項を後期教養教育として博物館科目内で取り扱うことで、学芸員課程は体験談的博物館論を超えて専門教養教育としての機能を高め、知性と教養ある人材の育成に一層寄与することができるだろう。

［履歴］

・2022 年度

2 年生開講、秋学期 金曜 9･10 限／履修登録者：計 50 名

NN：1 名、HJ：3 名、HI：1 名、HH：20 名、FS：25 名

・2023 年度

2 年生開講、秋学期 金曜 9･10 限／履修登録者：計 44 名

NN：2 名、HJ：14 名、HI：0 名、HH：23 名、FS：5 名

［付記］

中部大学は愛知県陶磁美術館の「大学等パートナーシップ事業」に参加しており、近年はこの一環として、中部大学学芸員課程「博物館実習」事前指導の一部を陶磁美術館で行ってきた。筆者は陶磁美術館における「博物館実習」館園実習を主担当していたことから、上記の事前指導（施設、設備や展示室及びバックヤード見学における説明）を担当した。こうした中で、中部大学学芸員課程より、博物館展示の実学教育ではなく、リベラルアーツ教育としての「博物館展示論」を講じてほしいとの依頼を受け、本講の出講へ至ったものである。貴重な機会を与えていただいた関係各位に感謝申し上げます。

コミュニケーションとしての展示－モノを並べて見せるとは何か?－

(1)基本用語

＊ 展覧会／展示会／展示

（国語辞典）
①陳列　　見せるために、物品を並べること
②展示　　品物・作品を並べて一般の人に見せること
③display　　見せる、陳列する、飾る、表示する、誇示する
④exhibition　何かを陳列した行為の結果、展示されているもの全体、展示されている場所

(2)博物館展示原論

①基本設定
a 商業的展示　ディスプレイ、商品陳列　補充型陳列（オープンストック）／展示型陳列（ショーディスプレイ）
b 博物館展示　エキジビション

②博物館展示の考え方（「べき論」としての博物館展示論）
a 研究成果を表現する形態の一つ
　モノ(博物館資料)を、学術的研究に基づいて、教育的な配慮の下に提示する
　　モノを中心にして、伝えたいコンセプトを示し、その意味や価値を伝える
b 市民社会におけるコミュニケーション
　展示(室)とは、モノ(博物館資料)を媒介とした人々のコミュケーションの場
　　モノの属性、モノの選択と展示意図

→博物館使命(基本理念)の達成－設置者の目的･目標の達成の一環を担う

(3)展示の作用

①表象論
a 視覚による語り／騙り
　展示する側のメッセージ（不在の事実）を、説明的に視覚化する
b 曖昧なメッセージ性
　受け手側の解釈が入る余地が大きい、送信-受信者間の摩擦を軽減 －誤解の発生
c 非対称性
　展示は一方的にモノをみせる仕掛け。全ての観覧者を完全に満足させることはありえない
　展示する側・展示される側・展示を見る側、それぞれの関係当事者の立場が対等ではない

②記号論
a 知的スポットとしての博物館（←研究機関･教育機関としての博物館）
　モノの本物性、モノの形をした正しい情報
b 眼の欲望、眼の暴力
　モノが本来帯びている(いた)意味、学芸員によって付与された意味、意味の剥奪と付与
　礼拝価値／展示価値、情報価値／象徴価値

③コミュニケーション論
a メディアとしての博物館
　コミュニケーション(教育)機能／インフォメーション(情報)機能
b 博物館コミュニケーションの特質
　メディアの解離不能性、直感的受容、特定空間における同時性、外部空間･時間との断絶
c 博物館のコミュニケーション様式
　一方向性、「伝達」、世代間の時間的コミュニケーション

＊ 直接的コミュニケーション、時間と空間を共有
　情報レベルとエネルギーレベルで、存在論的な認知を働きかける
→社会意識と記憶を形成

＊ 博物館メディエーション Mediation（仲介）
　学芸員は仲介者として、文化的概念、博物館資料と来館者を接続する

展示史Ⅰ －日本人は、モノをどう見せてきたか?－

(1)原始･古代

①原始

縄文遺物・弥生遺物

生活における装飾 －宗教的儀式、政治的儀式

②古墳時代

古墳

墳丘と埴輪の配列、副葬品の配置 －権力を誇示

③律令期-王朝期

官衙・寺院、年中行事

政治、宗教、文化を掌握する権力者の意思表示

(2)中世･近世初期

①室町文化

「君台観左右帳記」-書院飾り、茶花香

②桃山文化

天守閣・障壁画、茶室・茶会

(3)近世

①店舗

暖簾(のれん)と看板

日除け/塵除け、目印から、宣伝、装飾へ －サインデザイン

②興業

a 見世物　技術･技能、自然奇物、人形･細工　　－イベントプロデュース

b 開帳　　秘仏･宝物

c 物産会　博物学(医学･本草学など)の普及

* 看板描き、興行師

(4)近現代

①内国勧業博覧会

万国博覧会･産業振興館(物産館)由来。政府主催から地方自治体、民間団体、新聞社へ

②共進会

農工産物の出品、技術交流と向上。政府、地方官庁主催から民間団体へ

③陳列会･展覧会、展示会

商品系展示と学芸系展示の分化。近代博物館の成立、保安･保存と学術研究

* 博覧会屋 (“ランカイ屋”)、装飾屋

④戦後大形博覧会･テーマパーク

演出技術の実験と博物館展示への導入

⑤「展示学」の成立

展示：芸術と工学が一体化した芸術工学

建築･グラフィック･造形･映像/音響･照明･コンピュータ等の領域を総合化する技術学

→現実空間という場の特性を活かした情報伝達

関心と興味を引くエンターテイメント的磁場の演出、芸術的な洗練

* ディスプレイ業

販売促進、教育啓蒙、情報伝達等の機能を発揮させることを目的として、

店舗、博覧会会場、催事などの展示等に係る

調査、企画、設計、展示構成、製作、施工監理を一貫して請け負い

施設の内装、外装、展示装置、機械設備などを総合的に構成演出する

展示史Ⅱ－見せる/見ることで、何が起きたのか?－

(1)「驚異の部屋」－15/16-17 世紀－

①時空認識の拡大

a ルネッサンス人文主義

古典古代への関心

b 大航海時代

世界認識の拡大

②モノの収集と陳列

a 収集

古代遺物、絵画･彫刻･工芸品、西欧以外の文物･自然物

世界のカタログ化、知による世界の支配

b 陳列

「驚異の部屋」－「クンストカンマー」(人工物蒐集室)、「ヴンダーカンマー」(驚異物蒐集室)

「世界のミクロコズム」（大きな宇宙の縮図）

(2)近代博物館の成立と万国博覧会－18-19 世紀－

①分類学としての博物学

中世的秩序→博物学→近代科学的宇宙像

モノが有する本来の意味を切り離し、眼に見える特徴だけを基準に分類、並べて整理する

脱価値的パースペクティブ、「可視的なものに、名を与える作業」(フーコー)

②近代博物館の成立

フランス王立植物園附属博物館（のちの自然史博物館)、ルーブル美術館

アシュモレアン博物館、大英博物館

ガラスケースを多用した展示場の成立、視覚だけを利用した観覧の開始。

知覚される対象のある空間と、知覚する人がいる空間との、認識論的な分離

③万国博覧会の開催

テーマに基づいたモノの展示、テーマをもった博物館

展示テーマに合わせた展示方法の工夫

美術館展示におけるアイソレーション･スペースの採用、ホワイトキューブ

一遍に「見る」から、一つ一つ「鑑賞する」へ。モノの所有から、知識とセンスの所有へ

(3)博物館展示の政治的効果

①「みせる」-「展示」

a「みせる」/「みる」は、政治的な行為－所有、支配、管理。「視線の政治学」

視覚的な対象物を通じて、人間の社会関係を承認、人間と自然との関係を観念的に整理

b「展示」は、「みせたい」という方向で整序された「みる」制度、権力による視覚操作の政治技法

②近代博物館展示の思想的基盤と作用

a 啓蒙主義（進歩主義、世界市民主義）

モノを「公共財産」として展示公開する →「公衆」意識を形成する

モノを普遍的価値において展示する →「人類」意識を形成する

b ロマン主義（保守主義、歴史主義）

国･地方公共団体による展示 →「国民」「住民」意識を形成する

→西欧中世の教会に代わる、西欧型近代社会の「新しい祭式」(ポミアン)

③(願望としての)ポストモダン･ミュージアム論

a 民族資料展示における美的展示の分化

機能主義展示、コンテキスト展示、美的展示

b ミュージアムの図書館化

情報伝達装置(メディア)としての博物館、ムゼイオン

調査研究と展示－事例紹介：陶磁美術館における研究と展示のライフサイクル－

(1)古陶磁狛犬

①導入事業

・2002 年度

テーマ展示「館蔵中世陶器展Ⅲ 中世の施釉陶器－瀬戸･美濃－」

展覧会図録に、中世施釉陶器古窯跡の調査研究史について執筆･掲載

・2003 年度

企画展/埋蔵文化展「歴史の風景－遺跡からのメッセージ－」

愛知県埋蔵文化財センターと共同で、愛知県の考古学的通史展を開催

②基礎事業

・2006 年度

企画展「陶磁のこま犬百面相」－「遺跡出土の陶製狛犬－中世･近世初期－」担当

先行研究を踏まえつつ、中世･近世初期陶製狛犬の変遷について仮説を提唱

③展開事業

・2014 年度－2018 年度前期

愛知県史編さん委員会文化財部会工芸班陶磁グループ狛犬担当

県内指定文化財の陶製狛犬を悉皆調査、概説執筆

・2015 年度

豊田市指定文化財「上中切の陶製狛犬」受託

・2018 年度後期

『愛知県史 別編 文化財 5 工芸』刊行記念展示/テーマ展示「愛知うつわ物語－江戸･明治のやきもの－」

愛知県史･工芸に掲載された主要陶磁作品により出品構成

・2023 年度

豊川市桜ケ丘ミュージアム特別展「神殿狛犬の魅力」

陶製狛犬部門への展示協力、展覧会図録への寄稿

(2)指定文化財

①導入事業

・2012 年度

企画展/埋蔵文化財展/地域連携事業「戦国のあいち－信長の見た城館･陶磁･世界－」

特集陳列「東海最大の弥生集落 朝日遺跡の至宝」、出品資料が会期中に重要文化財指定

・2016 年度

あいちトリエンナーレ 2016 特別連携事業/企画展/埋蔵文化財展「弥生への旅 朝日遺跡－2000 年前のキャラヴァンサライ－」

重要文化財「愛知県朝日遺跡出土品」により展示構成

②基礎事業

・2018 年度

特別企画展「知られざる古代の名陶 猿投窯」

国指定重要文化財、県市指定文化財の猿投窯製品を集成

③展開事業

・2019 年度

猿投環耳付長頸瓶受贈

特別企画展「愛知やきものセレクション－県指定文化財の陶磁器－」

工芸・考古・有形民俗の分野で指定されている陶磁、

史跡の窯跡から出土した資料、無形文化財技術保持作家の制作した作品

・2021 年度

愛知県指定文化財指定

猿投環耳付長頸瓶・猿投灰釉長頸瓶が県文化財指定

テーマ展「愛知の新たな宝－近年収蔵の重要古陶磁－」

猿投環耳付長頸瓶・猿投灰釉長頸瓶と関連作品等

・2022 年度

重要考古資料に関する懇談会（事務局：文化庁文化財第一課）

重要文化財/美術工芸品（考古資料）の指定候補を提議

中部大学*博物館展示論 2023･第 5 講

展示の政治性と社会性－戦争展示と現代美術展示をめぐって何が起きているのか?－

(1)戦争展示－名古屋官庁街の常設二館－

①愛知･名古屋 戦争に関する資料館（2015 年/愛知県庁大津橋分室 1 階/戦争に関する資料館運営協議会）

a 基本理念

戦争に関する実物資料(県民提供)の展示により、戦争体験を次世代に引き継ぎ、戦争の残した教訓と平和の大切さを学び、平和を希求する心を育み、平和な社会の発展に寄与する

b 展示

i 県民の戦争体験、戦争に関わる地域史。資料を通じて来館者が平和と戦争について考える

ii 戦争に関わる地域史、県民の戦争体験（銃後のくらし、軍隊･戦地）、戦後の地域史

②愛知平和記念館（1976 年/桜華会館別館 4 階/(一財)桜華会館･愛知県遺族連合会）

a 基本理念

戦没者の遺品等(県民遺族提供)の展示により、先人の苦難を偲び、戦没者に対して崇敬、感謝して、恒久平和を維持推進する。

b 展示

i 戦没者遺品･遺書･参考資料。遺品を通じて来館者が戦争と平和について考える

ii 外地戦場別展示、戦没者別展示

㊂戦争と平和の資料館ピースあいち（2007 年/名東区よもぎ台/NPO 平和のための戦争メモリアルセンター）

(2)現代美術展示－「表現の不自由展」の軌跡､特に「平和の少女像」(「慰安婦像」)を中心に－

①二千ゼロ年代から十年代中頃まで

i 2012 年 少女像(小)、東京都美術館「国際交流展」に出品、開会後展示中止

ii 2015 年 少女像(小)･同(大)、ギャラリー古藤「表現の不自由展」に出品
過去に公共文化施設で展示不許可となった作品を展示紹介
言論と表現の自由について問題提起する

②2019 年度

a あいちトリエンナーレ 2019「情の時代」

i 8 月 1 日－10 月 14 日、愛知芸術文化センターほか

ii あいちトリエンナーレ実行委員会
運営部門「運営会議」/会長:知事、芸術部門(芸術監督･キュレーター)

b「表現の不自由展･その後」

i 「表現の不自由展」2015 を拡張、少女像(小)･同(大)出品

ii あいちトリエンナーレ 2019 の展覧会内展覧会として開催。「表現の不自由展」実行委員会
トリ実委が不自由展実委に、「表現の不自由展･その後」の開催を委託

iii 8 月 4 日中止、10 月 8 日再開

c 本講義における主な論点

i 公共施設における芸術展示
芸術部門の自律性。展示をしたことだけで、作品から読み取れる政治的メッセージを公立美術館や自治体が支持したことにはならない

ii 展示の中止
危機管理上の正当な理由に基づく中止は、「検閲」(表現の自由の侵害)には当たらない

iii “キュレーション上の課題”
会場レイアウト、解説デザイン－「展覧会内展覧会」であることについての説明、作者･展示企画者の意図についての説明、出品選択

iv 展示作品と展示の作用－「平和の少女像」は「政治的プロパガンダの道具」か「アート」か－
作者･展示企画者の意図と関係なく、多様な受け止め方が可能
文脈から切り取られた情報の流通
少女像としての印象、政治的プロパガンダの「道具」というイメージ、
出品歴及び「表現の不自由展･その後」出品作としての意味、「表現の不自由展･その後」全体から受ける印象

③2021 年

a 東京展 延期

b 名古屋展 7 月 6 日開始/市民ギャラリー栄、8 日中止（予定会期は 11 日まで）

c 大阪展 7 月 16 日－18 日/大阪府立労働センター

展示の諸形態－展示を見る/考えるポイントは?－

(1)代表的な分類基準と類型

①展示期間
　常設展示、企画展示（短期展示）
②展示場所
　屋内展示、屋外展示、野外展示、移動展示

③展示形態
　静態展示、動態展示、参加･体験展示(ハンズ･オン)、実演展示、実験展示、飼育･栽培展示
④情報媒体
　実物資料、パネル、模型、ジオラマ･パノラマ、照明、映像･音響、演示
⑤資料配置･配列
　時間軸展示/プロセス展示、空間軸展示。
　単体展示、集合展示。構造展示/生態展示。
　分類展示、比較･対照展示、象徴展示
⑥展示動線上要素
　導入展示、象徴展示、分節点展示、エンディング展示

⑦展示意図（資料）
　提示型展示（鑑賞型展示）、説示型展示（説明型展示）/教育型展示
⑧展示意図（利用者）
　概説展示と収蔵展示－二元展示･二重展示

⑨学術的視座
　単一学域展示、複合学域展示/総合(学域)展示
⑩連携展示
　博物館と学校、博物館と図書館、博物館･図書館･公文書館（MLA 連携）
　回想法展示、マイミュージアム展示、

(2)専門分野別分類

①歴史民俗系博物館
　歴史　　時系列展示、地域性・地域間交流－国史。実物・模型・ジオラマ
　考古　　遺跡、遺構(実物移築・復元)、遺物(一括遺物、編年・分布・機能・階層／交流)
　民族･民俗　機能主義展示・コンテキスト展示・美的展示、

②美術館　　原物、個展・グループ展・テーマ展

③自然史系博物館　分類展示・地域自然誌展示・ストーリー展示、ジオラマ展示
④理工系博物館
　科学技術史　時間軸・空間軸・系統分類、静止・動態・演示/実演
　科学館　　系統分類展示・構造/機能展示、ハンズオン展示
　プラネタリウム　大形映像展示

⑤動物園　　系統分類・動物地理・行動学、行動展示・生態的展示/生息環境一体型展示
⑥水族館　　地理学・分類学・生物学・生態学・環境再現・環境一体・行動学・演示
⑦植物園　　系統分類・特定種/グループ・生態系・植物科学/自然保護

⑧総合博物館　人文科学系資料と自然/理工科学資料の分類展示／総合展示

⑨野外博物館　建造物(移築)展示、エコ･ミュージアム
⑩学校博物館　研究資料/教育用教材、教員/学生･生徒（→第 15 講「展示を見る」）

展示の制作Ⅰ －企画展示をどうやって企画するのか?－

⑴企画

①考え方

* 館のミッションを実現する／学芸員の自由な発想

a ミッション：なぜ、この企画展を行うのか。
b テーマ　　：何についての企画展か。
c 対象者　　：だれのための企画か。対象者の期待･ニーズに応えられるか。
d メッセージ：何を伝えようとしているのか。
e 構成　　：どのような展示の組み立てになるか。

②企画実務（参考:美術館企画展の企画）

a 制約
　i 館の設立目的･収集資料　ii 建築空間･展示室　iii 館の「伝統」
　iv 学芸員の専門･能力　v 記念･周年企画　vi “持ち込み”

b 内容決定要素
　i 連続テーマ展示、　ii 新規テーマ展示　iii 他館コレクション展示

c 実施パターン
　i 定例展示　：
　ii 普及展示　：美術のすばらしさを 分かりやすく
　iii 研究発表展示　：研究の論旨を 実物で
　iv 新資料紹介展示　：分からないものを 積極的に
　v 問題追求展示　：関連作品を明確に
　vi 「論」としての展示：ある美術の系譜を 総合して

⑵計画

①考え方

a テーマへのアプローチは斬新か。それが展示に反映しているか
b 企画展としての資料内容、情報内容があるか。
c 個々の展示、コーナーとしての展示、企画展展示自体に魅力があるか。
d 展示の構成は観覧者にわかりやすいか。
e 展示は観覧者に感動や新しい発見、そして変化をもたらすか。
f 知的･美的･情緒的感動など、楽しめるか。
g 展示は観覧者にメッセージを伝えられるか。
h 参加性、体験性は考慮されているか。
i 中心ターゲットとなる観覧者以外の、観覧が見込まれる対象者カテゴリーに対応した展示の広がりを考慮しているか。

②開催要項･出品目録の作成

a 開催要項
　i 展覧会名称　ii 会期　iii 会場
　iv 開催関係者　v 開催趣旨（ミッション・テーマ・対象者・メッセージ）
　vi 展示構成･内容　vii 教育･普及事業　viii 利用案内･交通案内

b 出品目録
　i 作品基本情報　：資料名称、産地･作者、時代･年代、法量、来歴、状態、保全状況
　ii 所蔵関係情報　：所蔵者名、所蔵者住所･連絡先、保管場所
　　所蔵機関･保管機関 代表者氏名・貸出担当者氏名

③予算化

a 支出
　i 旅費　ii 報償費　iii 運搬･展示作業
　iv デザイン　v 印刷費　vi 展示工事費
　vii 監視　viii 広告費

b 収入
　i 入館料　ii 図録売上　iii 外部補助

展示の制作Ⅱ －企画展示を開催するために、必要な実務とは?－

(1)借用･運搬

①準備：資料調査･出品交渉、出品依頼状提出－出品承諾書受領
②借用：集荷通知提出、点検･記録、展示指導、梱包、借用書発行、運搬
③（陳列、会期開始－会期終了、撤収）
④返却：返却通知提出、運搬、開梱、点検、借用書返却

(2)印刷物

①概要
a 広報･宣伝用印刷物：ポスター・チラシ
b 教育･普及用印刷物：図録（→第 14 講「展示解説書Ⅱ」）、解説シート･ワークシート（→第 13 講「展示解説書Ⅰ」）
②デザイン
企画、情報収集－整理･分析、設計
③印刷
入稿、校正、本紙印刷･製本－納品

(3)展示工事

①概要
a 展示計画（→第 9 講「展示の技術」）
ⅰ 構成デザイン：ゾーニング/会場レイアウト、動線計画
ⅱ 環境管理　　：温湿度、光、虫菌害、空気環境、振動、破壊･盗難、災害
ⅲ 照明　　：照度･光色･配光･光源、ゾーン/展示室－資料･解説、演出
ⅳ 展示什器　　：展示ケース、展示台･展示具、
ⅴ サイン･解説　：看板、パネル・キャプション、
b 工作物
ⅰ 館外発注：看板、展示台・キャプション台
ⅱ 館内作成：パネル・キャプション
②デザイン
企画、情報収集－整理･分析、設計
③工事
入稿、校正、作成着手･仕上げ－納品

(4)展示作業

[陳列]
①設営：展示ケース･展示台設置、パネル設置
②陳列：資料開梱･点検、陳列、キャプション設置、照明調整
[撤収]
③撤収：資料点検･梱包、パネル･キャプション撤収
④撤去：照明･展示台･展示ケース撤去

(5)管理･運営

①環境管理
②スタッフ　　：受付･監視、警備、清掃、設備管理、食堂･売店、
広報･宣伝、ボランティア

(6)教育･普及事業

(7)広報･宣伝活動

展示の技術－資料を守り、資料を見せるための技と美とは?－

(1)構成デザイン

①展示ストーリー/展示シナリオ

展示構成（主題(テーマ)－章(項目)立て、資料・情報、演出）→展示空間、ゾーニング

②会場レイアウト

a 動線計画

i 計画：強制動線、フリー動線。動線方向（右回り/左回り）

ii 実態：観覧者は自由に展示を選択して見る

b パース・平面図・立面図

(2)環境管理

①温湿度

20℃・50-60%、材質に応じた設定、調湿剤による調整

②光

可視光線（照度・照射時間を調整）、紫外線（劣化促進、除去）、赤外線（表面温度上昇、除去）

③虫菌害

IPM（Integrated Pest Management 総合的有害生物管理、整理整頓･掃除･観察による予防的病虫害対策）

④空気環境

有毒ガス（有機酸・アンモニアの放出）

⑤振動

重し・テグス留め、免震展示台・免震展示ケース

⑥破壊･盗難

監視、結界

⑦災害

消火設備・消火器、誘導灯・避難経路、

(3)照明

①基本要素

a 照度（50－200lx(ルクス)）

b 光色（色温度：電球色･2,700K(ケルビン)、白色･3,500K）

c 配光（光度/狭－広）

d 光源（蛍光灯・白熱灯、LED）

②照明計画･ライティング

ゾーン/展示室、資料･解説。グレア対策（直接･間接）、シューティング－調整

③演出

正しさ/美しさ。色・質感・陰影

(4)展示什器

①展示ケース

a 分類

i 移動･形状　固定ケース/可動ケース、壁面ケース･ハイケース･覗きケース

ii 保存環境　自然循環式・密閉式(エアタイト)

b 仕様

②展示台・展示具

a 展示台　平台･敷板/斜台、合板-塗装/クロス/フェルト/紙

b 展示具　安全性/展示効果。支持具（衣桁・皿立て・刀掛け、･･･）、固定具（ワイヤー・テグス、･･･）

③その他

可動壁(パーテーション)・サインスタンド、休憩用椅子

(5)サイン･解説（→第 12 講「サイン･解説」）

看板、パネル・キャプション、

計画と評価－なぜ、その常設展示を開催するのか?－

＊マネジメント･サイクル

・PDCA サイクル：Plan(計画)－Do(実行)－Check(評価)－Action(改善)

(1)展示計画

①行政計画

[階層的目的手段体系]

a 考え方　目的－課題－手段

行政活動を通じて実現する目標－実現に向けて課せられた問題－問題解決のための方法

b 体系構造　政策－施策－事業、(基本構想－基本計画－実施計画、基本設計－実施設計)

c 策定･運用

i 上位の計画

ii 地域の分析(時代の要請、地域特性、住民の生活状況・ニーズ)

iii 前段階の計画の改善(評価結果に基づく施策･事業の改善策、現状の問題点･課題の分析)、

→計画（長期計画－中期計画－年次計画－年間事業計画－事業計画－展開計画）

目的：達成したい姿(抽象的) －目標：達成したい状態(具体的)

手段：目的･目標の達成に向けた具体的な取組(対象･時間･変容)

[効果連鎖モデル]

d 事業構造　インプット→アウトプット（活動－アウトプット）→アウトカム

投入資源は何か？→どんなサービスを提供するのか？－誰に提供するのか？

→対象者の何を変化させたいのか？－社会をどのように変えたいのか？

②展示計画（博物館建設、常設展示、常設展示大規模リニューアル）

a 基礎調査　地域の分析、既存施設（他館、自館）

b 基本構想　基本理念、事業構想、展示構想、立地･施設構想、管理運営構想

c 基本計画　活動計画、施設計画、管理運営計画。展示基本シナリオ

d 基本設計　建築基本設計、展示基本設計（図化）

e 実施設計　建築実施設計、展示実施設計（全原稿準備）

f 展示工事　建築施工、　展示工作物作成･設置、資料陳列

(2)展示評価

展示の開催趣旨(目標)－館の基本理念(ミッション)の達成

[ゴール･レファレンス法]

①企画段階評価

展示計画に対する外部的評価

②形成的評価

試作展示に対する実験的評価

a 観点

i 引きつける力　ii 保持する力　iii 手順の力

iv コミュニケーションの力　v 感情的な力

b 調査方法

i 数量的測定　ii 質的測定

③総括的評価

実施展示に対する結果的評価

a 観点

i 観覧者層の種別･内容　ii 観覧者の行動　iii 観覧者の学習内容･影響(効果)

b 調査方法

i 観察調査(定点観測･行動観測)　ii 面接調査･アンケート調査　iii 客観テスト

＊博物館･展示評価の観点は、利用者数か利用者満足度か

利用者数、図録売上率、収益率、パブリシティ活動成果。学芸関係者評価

アウトカム－来館者のミュージアム経験

レクリエーション、社交･交流、学習経験、審美的経験、祝祭的･賞賛的経験、魅惑的経験

展示の解説活動－博物館における解説の理論と方法は?－

(1)基本設定

①教育の構成

＊生涯教育(“生涯学習”)

a 学校教育

b 家庭教育

c 社会教育(“生涯学習”)　┬(狭義)：自発性(“生涯学習”)、多様性･地域性、体験性
　　└(広義)：狭義の社会教育＋普及･啓発

公民館・図書館・博物館、

②博物館の基幹事業

調査･研究－収集･保存－┬→展示
　　└→教育･普及

③教育と展示

a 広義の「博物館教育」：展示＋教育･普及

b 狭義の「博物館教育」：教育･普及

(2)広義の「博物館教育」の諸問題

①「博物館教育」を指す言葉

a 普及　　：研究成果の普及
　　(関連用語) 啓発　　、普及･啓発、普及啓発

b 教育普及：社会教育(広義)：狭義の社会教育＋普及啓発、教育的普及、教育の普及
　　(関連用語) 教育･普及、普及･教育、普及教育

c 教育　　：社会教育(狭義)
　　(関連用語) 学習支援、学習交流、サービス、コミュニケーション、

②「博物館教育」実践の二相

a 普及 (普及･啓発)

公共の観点から、現代的･社会的課題に対応するために必要な事項を普及し、啓発する。

b 教育 (狭義の社会教育)

個人の自己学習能力を育み、自分で自分の学習を発展させていく力量の形成を図る。

→「普及･教育」、「教育･普及」･「教育普及」

(3)展示解説の方法

①基本方法

a 言葉による解説 (一方向)

解説パネル・解説キャプション、解説シート・ワークシート、音声ガイド、

b グラフィック･動画、模型･ジオラマによる解説

図版パネル (静止画：写真･イラスト)、動画 (実写･アニメーション)、レプリカ/複製・情景復元

c 人による解説 (双方向)

学芸員、解説員、ボランティア

②展示意図 (第 6 講「展示の諸形態」)

提示型展示 (鑑賞型展示) －説示型展示 (説明型展示)

近現代美術館－古美術系美術館－歴史民俗系博物館・自然史系博物館－理工系博物館

cf 教育学における「学習」の諸相

a 系統主義

実証主義と行動主義。受動的な学習者

b 経験主義

構成主義と状況主義。能動的な学習者

サイン･解説－歩きながら、立って読んでもらうための工夫とは?－

＊展示グラフィックの考え方

・展示空間の「世界観」を演出する要素の一つ
　伝統的／重厚、カジュアル／明るく楽しい、高級/おしゃれ
・展示のテーマを観覧者に理解してもらい、メッセージを受け取ってもらう技術の一つ
　期待感―驚き・発見・共感・コミュニケーション―満足感

(1)サイン･解説の基本構成

①展示全体
　タイトル看板、誘導サイン、挨拶･謝辞パネル・プロローグ/エピローグパネル
　図版パネル
②展示内容
　コーナーサイン、章解説パネル・節解説パネル／キャプション・項解説パネル／キャプション
　図版パネル
③展示資料
　資料キャプション、資料解説キャプション(資料解説パネル)
　図版パネル

(2)フォーマット･デザイン

①基本仕様
　展示構成･ゾーニングー基本構成上の種類･形･サイズ
②テキスト執筆要領（順番に／全部を読む人はほとんどいない）
　文字数　　1 文 30／50w、解説 200w
　文体　　対象像に合った表現。
　内容　　展示構成上の位置付け／資料存在の文脈、発見･評価、観覧者にとっての関係
　　キャッチコピー＋解説。詳細情報は他メディアへ
③テキスト･デザイン
　書体　　ゴシック体、明朝体、教科書体･隷書体。装飾系書体
　字間　　書体と一行文字数次第。画数多い漢字は空け気味、ひらがなカタカナは詰気味
　行間　　文字天地の 75%程度
　一行文字数　20～28w／−35
④色彩計画（→(3)②）

(3)人間工学上の基礎知識

①視点と視覚対象
　a 視線範囲（頭を動かして無理なく観ることができる範囲）
　　i 集中的に視認･可読：上下 40～60°、比較的楽に視認･可読 90。
　　ii 基準視線より平常視線は下方 10。平常視線より上 25、下 20、計 45。水平方向左右各 45
　b 視線高と視認/可読距離
　　i 成人 1,500mm／高学年児童･車椅子 1,200。上限 1,800、下限 700～600
　　ii サイン：視認 6,000 以上・可読 3,000～4,000、解説：可読 2,000～1,000
②色彩
　a 色彩基礎･共感覚
　　i 色相：有彩色 R･Y･G･B･P
　　無彩色 白･灰色(白＋黒)･黒
　　明清色･中間色･暗清色
　　→カラー･イメージ：赤･橙･黄･緑･青･紫
　　ii 色調：明度(明るさ)＋彩度(鮮やかさ)
　　→トーン･イメージ：派手･明るい･地味･暗い･無彩色
　b 色彩計画
　　i テーマカラー　：「共感覚」
　　ii コーナーカラー：「展示構成」の上に色を配置する

展示解説書Ⅰ －ワークシートと解説シートの違いは?－

(1)ワークシート

①考え方

・呼びかけや設問で展示資料に利用者を引き付け、観察の仕方のヒントを与えることによって、発見のよろこびや新たな理解へ導くもの

*正しい理解を教示的にではなく、学習者自らが導き出せるように支援 ←経験主義（構成主義）

②企画

a ワークシートの目的と方針
展示資料の選定と主題･目的（学んでほしい内容･メッセージは何か）

b 運用形態　実施日時・利用者・運用組織・指導・配布・利用時間・報酬
基本設計　設問回答・デザイン・仕様

③設問と回答の設定

a 設問：閉じられた質問－開かれた質問
：指定の資料を見つけさせる・資料や解説から/模型の観察から回答を見つけさせる
資料の観察から絵画等の完成を促す・資料と利用者の関係を問う・感想を求める
体験を促す その結果や感想を求める・複数のメンバーで設問に挑戦させる…

b 回答：回答へ至った過程の重視
：マーキング・正誤式・多肢選択式・穴埋式記述・記述式・図画工作等完成
自由記述式(感想･意見の記述)…

④留意点

a 主題：館の使命へつながるか。利用者の学習レベルとの妥当性、学校教育とのリンク。
主題内容のおもしろさ－資料のおもしろさ。明示的教育環境。

b 設問：答えだけを求めるのでなく、資料を観察し、理解を伴う設問になっているか。
多重知能理論への考慮。利用者の興味･関心･既有知識との関連付け。
参加性･体験性･共同性

c 回答：設問の回答方法として適しているか。
対象年齢への考慮。十分な回答スペース。

d 表現：利用者に分かりやすい簡潔な表現になっているか。
一問一答-問題の内容と答え方の明確性。表記の統一性、ルビ表記基準の明確性。

e 欠格：設問が過度に簡単/難解、瑣末、誘導･強制的、展示解説を読んで答えるだけ。
展示の十分な観察･思考を伴わないゲーム化。テーマと無関係な報酬。

⑤デザインの基本

a 読みやすさ　：利用者にわかりやすい簡潔な文章
b 見やすさ　：文の行間が確保されている・整っている・メリハリがある
地と図がはっきりしている・印刷がはっきりしている
c 楽しさ　：キャラクター・ネーミング
d 参加の意思表示：記名欄
e 持ち帰り　：館名・展覧会名
f 継続･発展　：ツール自体が改良変化していける

(2)展示解説シート

* ゴミ箱直行にならないために

a 価値ある情報･お役立ち情報
b 情報としてのおもしろさ
c カタログや展示解説との差別化
d 多様なエントリーポイントを提示
e シリーズ化･ファイル化
f 本当に欲しい人のみに提供する仕組みづくり
g 有料化

展示解説書Ⅱ －展示図録は作品集か解説書か－

(1)考え方

①法的位置付けと実際

a 博物館資料に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書（博物館法第 3 条）

ⅰ 観覧者に対して展示作品を解説･紹介する小冊子（著作権法第 47 条）

ⅱ 観覧者に対して販売する小冊子。書籍(国際標準図書番号 ISBN 付与)ではない

ⅲ 著作権者の許諾なく、著作物を複製できる（著作権料免除）

b 展示関連の出版物

ⅰ 展示の記録（観覧者／非観覧者）

ⅱ 学術的研究成果の発信

ⅲ 一般的な普及啓発用資材

c 課題

ⅰ 小冊子と書籍の区分

ⅱ 「灰色文献」（ドキュメンテーション上の研究用語）

ⅲ 企画展示の開催準備実務の一部としての執筆･編集

②提示型展示(美術系)と説示型展示(歴史民俗系･自然系)の図録

a 提示系

出品作品の個別写真図版、基本情報(作品名・作者名・制作年・素材・寸法・署名・来歴・所蔵)、解説
－作品集、画集。作品そのものを見せる

cf カタログ･レゾネー特定の作家の全作品のデータを収録した出版物

b 説示系

出品資料の個別写真図版/集合写真、基本情報、事項解説、
参考図版(復元図・出土状況・遺跡位置図、使用状況、･･･)
－解説書。資料及びその背景事情、資料を通じて読み取れる事柄を解説する

(2)制作

①構成

a 表紙･裏表紙･背表紙、見返し

b 主催者挨拶、目次･凡例、謝辞

c 概説、用語解説・関連図版(地図･年表など)

d 図版(本文)

e 論考、作品解説、参考文献目録

f 出品目録

g 奥付

②工程

a 予算確保－編集方針･仕様の検討（版型、頁数、用紙、印刷方式、部数、入稿方法）

b 構成案･編集方針（展示構成案、写真等図版･解説の分量、執筆要項）

c フォーマット作成（1 頁/見開き 2 頁の設計図）

d 台割作成（印刷物全頁の構成設計図）

e 文字原稿執筆、画像図版準備（撮影/借用、作成）

f 入稿－デザイン校正・文字校正・色校正、校了－納品/検品－頒布

(3)ミュージアムにおける出版物マーケティング

①考え方

ミュージアムの資源を、出版物を通じて流通させる
－ターゲットとなる顧客を惹きつけ、拡大し、関心と関与を継続させるための投資
（ミュージアムが提供するサービス資源：本館施設・分館・巡回展及び貸出・館外プログラム・出版物・電子配布）

②検討課題

a そのミュージアムでは、どのような種類の出版物を発行すべきか

b どうすれば、より巧みにミュージアムの壁をこえて出版物を配布し、宣伝できるか

c ミュージアムは、出版を赤字で運営すべきか、コストを回収すべきか、収入を得るべきか、
どうすれば出版物はミュージアムの収入源となりうるか

展示を見る－中部大学民族資料博物館はどこがスゴイのか?－

(1)大学博物館

①機能

a 資源の集積と保管、活用　－大学が蓄積する「知」
b 研究成果の発表の場　－大学が生産する「知」
c 自校史、自校教育　－大学がたどった「知」
d 差異感のあるテーマ　－大学が体現する「知」
e 学芸員養成教育の場　－大学が育成する「知」
f 社会とのつながりを創る　－大学の社会への「知」の発信

②課題－学芸員課程との関連－

a 専門教育(専門教育)の内容を博物館で活用できるような、学芸員課程での博物館学の学び
－一般論の展開＋専門毎の体系化
b 大学カリキュラムにおける位置付け

(2)博物館展示論的見学のてびき

[文献/web 調査]

①館の概要

a 所在地・設置者・館種
b 基本理念・沿革、組織
c 事業概要　収蔵資料、展示、教育普及、調査研究

②展示事業の概要

a 展示期間別展示　常設展示/企画展示、1 年間-数年間の構成
b 展示場所　屋内展示･屋外展示･野外展示･移動展示

[現地調査]

③常設展

a 基本事項　展示名称、会期･会場、開催関係者、開催趣旨
b 会場構成　展示構成、会場レイアウト・動線
c 展示形態　静態展示/動態展示/参加体験展示/･･･
展示什器
d 情報媒体　実物資料、パネル、模型、ジオラマ･パノラマ、･･･
e 資料配置･配列　時間軸展示/空間軸展示
単体展示/集合展示/構造展示
分類展示/比較･対照展示/象徴展示
f サイン･解説　看板、パネル、キャプション
g 展示技術　環境管理、照明
h 展示意図(資料)　提示型展示/説示型展示、教育型展示
i 展示意図(利用者)　概説展示/収蔵展示
j 学術的視野　単一学域展示/複合学域展示/総合(学域)展示
k 展示作用(評価)　メイン/サブターゲットへの作用
理解･感動･発見、メッセージ伝達、行動変容
常設展示開催趣旨(目標)－館の基本理念(ミッション)の達成

④企画展示

a-j、k　＋企画展示としての斬新性、資料内容･情報内容

2022 年度の実施概況

実施№	実施日		内容
第 01 回	2022.09.23		オリエンテーション
		課題№01	あなたがこれまで見た博物館展示で、最も印象深かったもの、または人に勧めたいものについて、概要と理由を回答すること
第 02 回	2022.09.30	第 01 講	コミュケーションとしての展示
		課題№02	あなたが日本史上注目すべきと思われるディスプレイについて、概要と理由を回答すること
第 03 回	2022.10.07	第 02 講	展示史Ⅰ
		課題№03	あなたにとって、印象深いディスプレイ（博物館展示以外）について、概要と理由を回答すること
第 04 回	2022.10.14	第 03 講	展示史Ⅱ
		課題№04	神社や寺院についての展示紹介は、どのような課題があると思われるか。特に公立博物館における宗教展示は、どのような条件下で可能となるのか
第 05 回	2022.10.21	第 05 講	展示の政治性と社会性
		課題№07	本学附属三浦記念図書館 1 階エントランスホール壁面展示ケース(右側のみ)を使ったミニ企画展示を企画構想すること（展示タイトル、テーマ･大まかな内容）
第 06 回	2022.10.28	第 06 講	展示の諸形態
		課題№07	自分の、または誰かのミニ企画展示案、講評に対する感想
第 07 回	2022.11.11	第 07 講	展示の制作Ⅰ
		課題№08	開催要項作成者名公表の可否
第 08 回	2022.11.18	第 08 講	展示の制作Ⅱ
		課題№08	YAYOI 展ポスタデザイン案：A 案･B 案･C 案のうち、自分だったらどれを採用するか
第 09 回	2022.11.25	第 09 講	展示の技術
		課題№09	本学民族資料博物館の見学状況
第 10 回	2022.12.02	第 12 講	サイン･解説
		課題№08	本学附属三浦記念図書館 1 階エントランスホール壁面展示ケース(右側のみ)を使ったミニ企画展示を企画構想すること（開催要項の書式)。
第 11 回	2022.12.09	第 10 講	計画と評価
		課題№11	博物館で人か機器による解説を受けた体験があれば、概要を報告すること。または博物館以外で人か機器による解説で印象深かったものを報告すること
第 12 回	2022.12.16	第 11 講	展示の解説活動
		課題№11	「博物館教育」や“教育普及”の定義について、「博物館教育論」で聞いていた内容と違った点があったら報告すること
第 13 回	2022.12.23	第 13 講	展示解説書Ⅰ
		課題	9 月 23 日から 12 月 23 日までの授業内容について質問
第 14 回	2023.01.06		期末レポート対策講座
		課題	期末レポートで扱う予定のミュージアム名
第 15 回	2023.01.13	第 14 講	展示解説書Ⅱ
		第 15 講	展示を見る
		第 04 講	調査研究と展示
		課題	なし
	2023.02.06		（期末レポート提出締切）

第 13 回 課題（20221223 提出 A）

A 9 月 23 日から 12 月 23 日までの授業内容について質問すること。
B ただし、レポートに関する事項は、これとは別途に質問してよい。

［展示の作用］

01 現在あるいは将来の展示で、一方的な「見せる」「見る」ではない展示に少しでも変えるには何かできることがあるのでしょうか

［回答］

・博物館展示の本質が、近代社会を形成するための一方的な視覚装置であることは揺るぎない。たとえハンズ･オン展示を導入して視覚以外の要素をとりいれたところで、そのハンズ･オンのテーマや教材はミュージアムが一方的に設定したものである以上、系統主義的な統制的ミュージアムであることにはかわりない。

　ただし、展示ストーリーとして、例えば歴史民俗系博物館では、歴史の「進歩」や「伝統」などといった、よくある単一の思想基盤、カテゴリーに依拠するだけではない構成方法を探る方向性はあるだろう。一つの実物資料に対して、複数の視点や解釈が成り立つことー複数のストーリーが走ることを、展示によって示す。実物資料の多義性を、博物館が積極的に提示して、来館者に自由に選んでもらうことによって、展示の一方向性を多少は緩和できるように思う

02 教育的意味をもって、博物館が観覧者全員の思想観を変えることはできなくても、考え方をほぐしたり、新たな知見として自身の中に落とし込めたりするためにできること、その工夫は

［回答］

・基本的には 01 回答参照。そのほか、美術館ではしばらく前から、コレクターに焦点を合わせた企画展が開催されるようになった。「＊＊＊＊の眼」「＊＊＊＊コレクションの世界」とか（＊＊＊＊はコレクターの名前が入る）。博物館自身の直接的なメッセージではなく、あくまで過去の人物（コレクター）の考え方、思想を紹介するかたちで、観覧者のものの見方、考え方に揺さぶりをかける手法だ。博物館資料を“客観的な情報”としてではなく、一定の価値観に基づく情報として提示し、それに対する批判を受け入れる場をもうけておくこと。自国、自地域の歴史文化を、民族博物館における展示のように、他国・他地域の文化と並列的な一つの文化として紹介する視点と視線が必要なのかもしれない

［調査研究と展示］

03 博物館資料の学術的評価が変化した場合、展示品としての立場はどう方向づけされるのか。また、新たに人を引き付ける展示の仕方の工夫はどうなされるのか

［回答］

・博物館展示は、社会の要請に基づく情報発信と、調査研究の成果発信との性格を合わせ持つので、社会の要請と学術的な調査研究成果が変化すれば、展示テーマ・展示構成と、資料の展示価値も変化する。例えば、考古資料や美術工芸系であれば産地、時代年代、名称が変更されていく。歴史民俗系であれば、例えば昭和 30 年代の民俗資料であったものが、今では歴史資料として展示紹介されているし、理工系ではかつては最先端の技術製品であったものが、近年では技術遺産などとして位置づけられるようになってきた。要するに、展示の文脈をアップデートして、展示品の価値を更新していくのが、博物館学芸員の仕事

04 普段は収蔵されていて、あまり展示される機会が少ない作品に、日の目を当てるためにはどうしたらよいのか。また、常時展示されている作品の展示する際の工夫とはまた異なった工夫をするのか

［回答］

・展示企画上の工夫としては、例えば“寄贈品展”を開催して、普段はほぼ展示していない収蔵資料について、寄贈者に対する顕彰の性格を前面に打ち出して、産地や時代のテーマにとらわれることなく悉皆的に展示紹介する手がある。

　また、常設展示室の中に、“特集展示コーナー”など、ミニ企画展示コーナーを設置して、固定的な常設展示や大規模な企画展示では紹介しにくい資料群を紹介する選択肢もある。この場合、ミニとはいっても企画展示であることには変わりはないので、開催時点での社会の要請に基づく情報発信と、調査研究の成果発信として展示を構成する。展示の技術について特別なものはないが、常設展の中で、ミニ企画展示をどれだけ区別するか、あるいは統一感をもたせるかによって、パネルやキャプションのデザインが異なってくる。

　なお、考古系博物館では、収蔵庫の壁の一部をガラス窓（当然、建物内の通路側だが）として、収蔵状況を一部公開する構造としている事例がある。スペースの都合で展示できない収蔵資料を公開する選択肢の一つで、博物館の収蔵－保存機能そのものを展示する方法である

［展示の分類］
05 プラネタリウムやエコ･ミュージアムは比較的新しいものだと思ったが、様々な技術が発展している今日において、新しく生まれようとしている分野はありますか
［回答］
・技術というより、社会の要請によるだろう。戦後日本では、軍事を扱う展示施設は自衛隊関連施設に偏ってきたように思うが、これからはそうではなくなるかもしれない。戦争遺跡を扱う遺跡博物館の整備が進んだり、体験コーナーを伴う軍事博物館が登場したりするかも

［展示の企画］
06 展示で一番心掛けていることは
［回答］
・学芸員業界的には、「展示」の言葉を展覧会または陳列作業の意味で使う。展覧会ということなら、展示の開催意義。社会の要請、館の基本理念･使命を達成するものであるか、あるいは学芸員の実施する展示として独創性があるかどうか。陳列作業という意味なら、展示資料の安全第一

07 企画展を開催するための理由を無理にでも考えろということだったが、無理やり考えた理由に対して、批判する声（今やる意味が考えられないなら、この展示は資源の無駄だ！みたいな）もあがったりするのか。企画展は、開催の理由から考えるのか（この展示をしたいから理由を考えよう！ではなくて、この展示をする明確な理由がここにあるから始めよう！のように）
［回答］
・展示は、社会の要請や館の基本理念･使命達成だけではなく、学芸員の調査研究発表の場でもある。社会の要請の方から企画を始めてもよいし、学芸員の方から企画を始めてもよい。学芸員の研究発表だけに終始してしまうと、それは学芸員による展示の私物化になってしまうので、後付けでもよいから社会との接点を考えなければならないということ。ただし、世の中、何をやっても批判はある。それは仕方がないことのように思う

08 展示を作る際に、子ども向け、大人向けにするとしたら、どちらの方がよいのか
［回答］
・博物館は、図書館や公民館と同様、主に成人を対象とした社会教育施設。ただし、図書館や公民館に児童図書コーナーがあるように、博物館でも子どもを対象とした事業があってよいし、科学館のように主たる来館者が子どもであっても問題はない

09 館へのリピーターに関して、リピーターを対象として焦点を絞った展示をするのか、学習意欲の高い客層として流すのか。前者の場合、新規来館者との折り合いを、展示の中でどうつけるのか
［回答］
・展示の方針として、どちらでもあり得る。前者の場合は、初心者向けキャプションと専門的なキャプションとの二元的な解説を設置して対応するか、ギャラリートークなどの教育普及事業で新規来館者層をフォローするのが現実的。後者を選択する場合は、リピーターからの批判は想定の上で展覧会を開く。選択するのは、学芸員または博物館としての意志と覚悟です

10 特別展をする時、特に主任なんかは誰によって決められているのか
［回答］
・学芸課長など、学芸系の幹部職員。ちなみに、学芸員の展示に関するキャリア形成としては、まず他学芸員が主担当する展示のアシスタントから始まり、次に自館の所蔵資料のみを用いたテーマ展示の主担当、その後に他館からの借用を含めた中規模企画展の主担当、大規模特別展の主担当へと進む（予算規模が大きくなっていく）。なお「主任学芸員」は、職名です

［展示の構成］
11 館の基本理念が伝わるように意識しなければならないこと、展示方針からずれのない展示内容にするために注意しなければならないことは何か。また、一般客が基本理念を適切に理解するために必要なこと、気を付けて見るべきポイントは何か
［回答］
・館の基本理念、展示方針は、言い換えれば展示のミッション、テーマとメッセージであり、開催要項では「開催趣旨」にあたる。
・まず、第 10 講的にいえば、展示の開催趣旨（目標）と館の基本理念（ミッション）を、該当の展示が達成するかどうかを、階層的目的手段体系と、効果連鎖モデルにおいて、企画段階で評価すること。展示の企画構想においては“あれもこれも”となりがちなので、目標とミッションの達成に結びつかない要素を構成内容から削除し、展示メッセージがより効果的に伝わるようにする。
　次に第 1、第 3 講的にいえば、展示とは本質的に、一方的で暴力的な行為であることを自覚し、学芸員は近代市民社会のエージェントとして、使命感をもって職務にあたることではないかと思う。
（次頁へ続く）

・展示の「開催趣旨」は概ねそのまま、展覧会チラシ裏面や公式 web サイトに掲載するほか、展示室入口ー展示導入部に挨拶パネルとして掲示する。また、展示構成の基本については、展示導入部で展示案内パネルとして掲示するか、解説シートとして配布することがおおい（YAYOI 展では「御挨拶」パネルと「御案内」パネル）。ミュージアム・リテラシーとしては、こうした展示導入部のパネルに対する意識向上が必要だろう。展示実施者は、展示構成デザイン上は、これらのパネルを読むための十分なスペースと動線を確保しておき、フォーマットデザイン上は、簡潔で読みやすいテキストとデザインにする必要がある

12 展示の制作の際に、展示の構成が観覧者に分かりやすいものを考えなければならないということを学んだが、分かりやすいものかどうかは、どうすれば分かるのか（解説パネルについても）
[回答]
・例えば、考古学では一般に、遺構・遺物のデータを時間差、地域差、機能差、階層差において分析整理する。情報デザイン的に言い換えれば、情報要素を並列か順序、分岐あるいは因果や階層といった関係性でとらえるということ。展示とは、２つ以上のモノを並べて見せることなので、それらモノの関係性が明確に把握され、表現できているかがカギとなる。

解説パネルについては第 12 講(1)。展示全体に関わるパネルなのか、展示内容に関わるパネルなのか、展示資料に関わるパネルなのか。サイン・解説の基本構成が分かりやすいとは、パネルの形やサイズ、フォント、カラーやイラストなどのフォーマットによって、どの種類、階層の情報を提供しているパネルなのかが、ぱっと見で把握できるかどうかである（挨拶パネルと各章の概説パネルが同じサイズ、同じフォーマットだったら、区別しにくいだろう）。

また、展示構成が解説パネル/キャプションで明示されているかも重要である（第＊章のパネル・キャプションには、第＊章のゾーンカラーやキャラクターが全て掲載されているとか。要するに、今自分がいるのは、展示構成上のどこなのかが明示的にガイドされているか）。

なお、解説パネル/キャプションのテキスト内容については 28 以下をご覧ください

13 先生が他館を訪ねた際に、参考になり、その展示構成に魅力を感じた場所
[回答]
・以前の授業や質問で扱ったものでは田原市博物館「渥美窯」展（2013 年）、新城市鳳来寺山自然科学博物館の常設展示。ほかに根津美術館「知られざる唐津」（2002 年）、渋谷区立松濤美術館「古道具、その行き先」（2012 年）。

根津美は伝世品と出土陶片の二元展示で、両者が有機的に関連付けられ、かつ最新の調査研究成果を示して、従来の定説を更新するものだった。松濤美は、前半は西洋民芸や骨董を紹介する“普通”の展示だったが、後半は雑巾や使用済コーヒーフィルターなど“ゴミ”を「貧」の美として紹介する展示だった。坂田和實（1945－2022.11）による「芸術」概念の更新を紹介する、画期的な展覧会であった

[展示の開催]（開催要項）
14 授業で紹介した陶磁美術館の開催要項、ワークシートについては、他の学芸員が作成したり、協力したりするのか
[回答]
・通常は、各種の業務、事業は正担当者と副担当者で実施している。これまで授業で紹介したものは講師が正担当者だった事例がほとんどだが、他に副担当者の学芸員がいて、業務、事業を分担している。他の学芸員も、自分が主担当者を務める他の展示事業などについては、各自で開催要項などを作成している。学芸員が大勢いる大型博物館などでは、各学芸員は数年に１回しか企画展示を主担当せず、普段は調査研究活動に専念しているところもあるようだ

15 開催要項を作成する際に、人を引き付けるための工夫は
[回答]
・タイトルと趣旨。展示の目的、内容、独自性を分かりやすく伝えるような言葉を選ぶ。書式としては、展示名称のフォントサイズを大きくし、項目名をゴチック体、本文を明朝体にし、項目毎に行間を開けるなど、メリハリをつけて読みやすくする。項目内での改ページを避け、ページ単位で内容のまとまりがあり、一目で構成内容が分かるレイアウトとする。可能であればキービジュアルとなる画像、イラストなどを掲載して、展示イメージを視覚的にも伝える

[展示の制作]
16 展示する作品の貸し借りについて、他の授業では自分で梱包して車で運ぶ場合があると言っていたが、博物館展示論では業者に頼むことが多いと学んだが、車で運ぶときはどのような時でしょうか
[回答]（次頁へ）

[回答]
・借用先が博物館ではない場合は、公用車などで運搬することもある。陶磁美術館の場合は、陶磁器のメーカー、生産者組合から借用する現行製品や陶芸作家の作品など。古美術、古文化財は、原則としては美術品輸送専用車。なお、所蔵者/出品者が、自分の車で館へ搬入することもある

17 資料を壁面展示ケース内に陳列する時に、体（肩）を先に入れるようにしていると言っていたが、ほかにも気を付けていることは何か
[回答]
・基本的に、資料は両手で持ち、資料から視線を外さない（人から話しかけられても、その人の方を見ずに答えます）

18 企画の途中で展示品などに不備や破損があった場合は、どのような対応をするのか
19 企画展のために他館から借用した資料を陳列･撤収または運搬中に破損した場合はどうするのか
[回答]
・資料調査の段階で、出品には不適当－資料が脆弱で、輸送や展示に耐えられないと判明するなどーと思われたら、出品しない。
　美術品輸送専門業者によって作業･運搬が行われる場合、通常は｢展示一貫保険｣に加入している（借用から展示、返却までの損害保険）。事故に対して保険適用とする場合は、現状回復までに必要な修復費用を保険からまかなうことがおおいようだ

20 ワークシートだけでなく、ポスターのデザインも学芸員が考えるのか
[回答]
・デザイナーに委託する予算がない場合は、学芸員がデザインすることもある（陶磁美術館では、展覧会ポスターは、基本的にデザイン委託する）。デザイナーに発注する場合でも、ラフスケッチを作って渡すことはある

21YAYOI 展でも愛知のやきものワークシートでもイラストがあったが、デザインが思った通りにならないことはありますか
[回答]
・イラストの内容については、学芸員が責任もって徹底的に監修する。かつて講師がやきもの学習マンガの制作を主担当した際には、シナリオ、ネーム、下絵の各段階で、ライターやマンガ家に様々な注文をつけ、講師が OK を出すまでは次の工程に進ませなかった

[展示の技術]
22“動線は基本右から左回りという話”があったが、理由は
[回答]
・それは、日本の古美術や典籍のような、縦書きで右から左へ視線を動かして読む/見ることを前提としている資料を展示紹介する時のはなし

23 強制動線とフリー動線の割合は、毎回目指している数字があるのか気になった
[回答
・特に数値として意識しているものはない

24 陶磁美術館南館常設展｢もっと伝えたい 愛知のやきもの｣では、照明はどうなっているか
[回答]
・ほとんどの展示ゾーンではフラットな照度にしている。ただし、制作工程を紹介する展示では、工程見本品ではフラット照明、完成品のみピンスポットとして、照度にメリハリをつけている。また、学習よりも鑑賞を主眼とする展示では、ケース内蛍光灯を消灯して、ピンスポットのみの照明としている箇所もある

[展示の評価]
25 調査方法としてのアンケートでは、子どもと大人のように分けてとることもしてよいのか
[回答]
・通常の展示では、あまりみかけない。ペーパーアンケートだと、対象年齢層の設定が難しいのだろう。ただし、子ども向け展示であれば、子どもと大人を分けてアンケート調査することは有効だろう

26 企画展の予算はだいたいたのんだ通り出るものですか? それとも、すごくしぶられたり、交渉したりするものですか?（お金大事なので）
[回答]
・近年の行政予算は、基本右下がり。要求通りに予算がつくことは稀。予算が足らないために、遠方からの資料借用を断念したり、展覧会の図録本文やパンフレット本文のレイアウトデザイン（版下作り）をデザイナーに発注できず、展示担当者が自分で制作したりすることもある

27 特別展で、予想より来館者数が少なかった場合は、どういった対処をするのか
[回答]
・観覧が有料の展示では、観覧者数－観覧料収入を見込んで予算を立てている。予想を下回った場合は、通常は一般財源から補填する。近年では、事務エリアの光熱水費を抑えるか、他の展示予算を削減するなどして、館全体の歳出を減らしてどうにかすることもある。
　ちなみに YAYOI 展では、有料観覧者数の目標値 5,740 人、実績値 2,484 人、
観覧料収入の目標値 4,721,000 円、実績値 1,928,310 円だった。ほかに図録販売収入 728,000 円。
総収入 2,656,310 円に対して、支出総額 9,045,179 円。収支比率は 21.4%だった

［展示の解説］（パネル･キャプション）
28 説示型展示では、展示の仕方を知らない人がやる展示ほど、パネルの文章が長くなってしまうイメージがある。このようになってしまう原因はどこにあると考えられるか
[回答]
・まず、当たり障りのない回答としては、展示担当者－研究者が「博物館体験論」、特に展示室における来館者の学習行動についての知見－ほとんどの人は解説を読まない－が不足していること。
　次に、当たり障りのある回答としては、展示担当者－研究者が同業者の視線を気にして仕事をしており、一般来館者の方を見ていないこと（これを本人に言ったら確実に嫌われますが）

29 美術館では一つ一つの作品についての解説が少ないが、解説は必要ないと考えられているのでしょうか。また、解説がよく書かれている美術館（近現代）はあるのでしょうか
[回答]
・近代美術展では、しばらく前から個別の作品解説が設置される傾向がある。一方で現代美術、特に制作されたばかりのコンテンポラリー･アートの展示では、作家についての解説はあっても、作品についての個別解説は少ない（というか、ほとんどない）。
　作品個別の解説がないのは、よく言えば、観覧者の自由な鑑賞を促しているとはいえる。教育においては強制的要素を避ける経験主義的な学習観－ゆとり教育、アクティブラーニングとかーが根強いことも一因かもしれない。しかし、より本質的には、美術館のもつ社会的選別機能だろう。

　キリスト教の神ではなく、人間の理性によって社会を構築し、進歩させていこうとする思想が、ヨーロッパ近代社会の啓蒙主義。ここから、人間の理性、精神性（の高さ）が「芸術」作品に現れる、「芸術」とは人間の理性、精神性を現すものだという、近代「芸術」が成立し、同時に美術館も始まった。
　芸術、美術は、人間の精神性を示すものであり、普遍的な価値があるから、公共財産として美術館で展示公開される。美術館で本来行われる鑑賞とは、観覧者の感覚によるものではなく、作品から作者の精神性、制作意図－概念を読み解く作業である。この作業には、制作技術や社会背景、美術史に関する知識が必須であるが、特に現代美術の展示では、この知識や作業を鑑賞者自身の力に委ねている。

　人間（作者）の理性、精神の産物に対しては、人間（鑑賞者）の理性、精神でアプローチすべしという、プロテスタント的な発想なのかもしれない。しかし、こんなことが現実に可能なのは、経済的、文化的に恵まれた人に限られているのではないだろうか。現実として美術館、特に現代美術展や古美術展への来館者層は、文化資本と経済資本に恵まれた社会階層にほぼ限定されていることは、周知の事実である（クラシック音楽とかも同じだ）。
　人は、自分と他人とを区別せずにはいられない。20 世紀初めに大衆社会、消費社会が成立し、モノの所有ではなく、知識とセンスの所有が自分と他人を差別化する新たな指標となった時、“分かる人だけ分かればよい”という発想が、美術館に生じたのだと思う。そして、この状態に対して、よく言えば改善、悪くいえば糊塗する手段が教育普及事業、例えばアレナス系の対話型鑑賞教育なのかもしれない

30 キャプションを詳しく書いてしまったり、学芸員の個人的な感想を加えてしまったりすると、展示品の本来のモノとしての意味が操作されてしまうとあったが、実際そういったキャプションを見たことはあるか。また、どんな展示に起きやすいのか。問いかけをするなど書くときのコツは何か
[回答]
・展示室のキャプションはサイズと文字数が限られているので、どんなキャプションでも、記載される情報内容は、学芸員による取捨選択の結果である。強いて言えば、常設展示では定説的、概説的な解説とすることがおおく、企画展示では担当学芸員がその展示独自の視点や見解を打ち出すことが目指されている。
　展覧会図録では、解説を執筆担当した学芸員名が明記されるが、展示室では基本無記名。ただし、一部の展示では学芸員の署名付きで解説パネル･キャプションが設置されることがある。学芸員名が明示されていれば、解説自体が学芸員個人の意見であることが分かりやすくなるだろう。
（次頁へ続く）

問いかけは、展示見学の強い意志をもたずに“何となく”来館した人とかを想定する。展示資料について好きになってもらおうなどとは考えず、資料の特徴、特質をつかみ、今の自分にとっての意義を考えられるきっかけ作りを目指す

31 文系と理系など共通して、意識できる「保持する力」を持てるようなキャプションにする方法はあるか
[回答]
・構成主義－経験主義の一つ－と知識観を共有する学習理論に、「足場組み」理論がある。簡単に言えば、課題を単純化して、活動の方向性を維持し、問題解決の方法を気づかせやすくすることで、学習を支援するという理論。要するに、詰め込み過ぎるなということ。
展示資料に対する学術的な評価を書き始めるとキリがない。この展示テーマにとって、この展示資料はどういう意味があるのかを簡潔に紹介する。展示テーマと展示資料について非常に知識がある書き手が、そのどちらも知らない来館者のために解説を書いているという意識が必要だろう

32 パネルのデザインで一番重要視する部分は
[回答]
・テキストの内容以外での、フォーマットデザインでは、文字の読みやすさ、特にフォントサイズ。トータルデザインでは、基本構成（どこに何を設置するか）

33 パネルに書かれている文章の頭文字だけが大きくなっているものがたまにありますが、これは来館者をパネルに引きつけるための工夫ということで合っているのでしょうか
[回答]
・段落の開始点、文頭の位置を示して、読み始めやすくしている

34 展示のテーマから連想される色とは異なる色を使うことはありますか。その場合、どのような効果が得られますか
[回答]
・展示内容よりも、展示構成上、他よりもどこかを目立たせる必要がある時。例えば、常設展示室の中に、短期のテーマ展示コーナーを設置している場合、そのテーマ展示コーナーの存在そのものを周囲とは区別して目立たせる必要があるので、テーマ展示の内容とは関係ない色となっていることもあるだろう

［展示の解説］（ワークシート）
35 ワークシートを作る際、一番重要視すべき場所はどこか
[回答]
・(1)②a 目的と方針の設定。これがダメだと、あと何やってもダメになる

36 ワークシートの設問は、だいたい何問くらい作るのか。また、閉じられた質問よりも開かれた質問の方が多いのか
[回答]
・設問数は想定利用時間によるが、たいていは一桁台のように思う。普及、系統主義的な要素を重視するなら閉じられた質問を多くし、教育、経験主義的な要素を重視するなら、開かれた質問を多くする。ワークシートは、本来は後者の性格が強いもの。しかし、学校団体利用を想定する場合には、前者の要素を積極的に取り入れて、教員が児童の成績評価をしやすいようにする

37 ワークシートを書くうえでの、子どもにわかりやすいコツなどはありますか
38 小学校低学年向けのワークシートを作成する場合、回答の設定では、自由記述式を減らすんですか
[回答]
・必ずしもそうではなく、設問そのものを簡単にして、自由記述の回答も短文か単語のみで済むように配慮する。学校教育で使うワークブックとは違うので、閉じられた設問しか設定できない回答形式に偏ることは避ける

39 小さい字を書くのが苦手な小学生について、具体的にどのくらいの回答スペースが必要か。また自由記述式の場合は、回答スペースをとにかく大きくすべきか
[回答]
・回答スペースは、回答させる内容や想定文量にもよる。子どもの字の大きさは、接客などするとすぐ分かる。設問に対する回答スペースをむやみに広くするのではなく、自由にメモできるスペースを確保しておけば、自由記述が苦手な子どもが肩身を狭く感じることもなく、自由記述が得意な子にも回答の余地を与えることができる

［展示の解説］（解説書）
53 売店で売っているような本（資料）は、子どもも分かりやすいように描かれていたりしたが、これも博物館側の学芸員が作成しているのか
［回答］
・館園のガイドブックや展覧会図録は、そこの学芸員などが執筆している。館園内で販売している一般的な書籍は、職員は執筆者としては関わっていないことがおおい

［展示の解説］（双方向）
54IT 技術の進歩によって、展示室でのコミュニケーションが後押しされていると考えることができるか。また、同時には展示室にいない人たちと、コミュニケーションできる仕組みが大規模館などで構築できるか
［回答］
・デジタルデバイスの進化、普及によって、一方向的な解説技術は進化したが、双方向的なコミュニケーションは、そうでもない気がする。名古屋市美・常設展示室の出口には、昔から感想ノートがあった。展示品について付箋に感想など書いて、そばの掲示板にどんどん貼り足していく参加型展示は、講師も企画実施したことがある。
　今の SNS 時代に、来館者へ必要な働きかけとは、同時的あるいは同時代的なコミュニケーションだけでなく、作品に対する過去の評価の蓄積を伝える、異時的あるいは通時代的なコミュニケーションであるように思う

55 先生が来てくれるお客さんと関わるうえで一番大切にしていることは何か
［回答］
・直接対面の接客ということなら、相手の興味関心・ニーズを把握して、それに対応した展示解説やリファレンス（他館展示や参考文献の紹介）を行うこと

56 子どもが苦手な学芸員はいますか
［回答］
・いるんじゃないでしょうか。講師は、小学校低学年やそれ以下に対しては、解説実践経験ほぼ無しです。小学校高学年と大学生には館内外でおそらく千回くらい解説や授業を実践してきましたが。職場体験・インターンに来る中高生に対応するのは努力を要します

［その他］
57 パネル・キャプションの意義、実物展示など様々な事柄を学習したが、それらの中で最も重要な展示様式は何ですか
［回答］
・質問の趣旨がよく分からないが、展示技術的には実物の配置配列、展示制作上は企画、運搬・展示作業や管理上は展示資料の保全

58 展示している内容が一見小学生向きではない展示をしている博物館や美術館で、対象者の幅を広げるにはどういった工夫をしているのか
［回答］
・いわゆる教育普及事業。子ども向け解説シート、ワークシートや、体験型ワークショップ

59 学校教育と連携する時、教育委員会に協力してもらっているのですか
［回答］
・基本は協力していただく（特に、博物館から学校への広報宣伝）。ただし、実務上は博物館の学芸員と学校現場の教員との直接連絡、意見交換などで業務が進められる（館園見学の下見(実踏)、事前打ち合わせ、実施当日など）。また、学芸員自身による情報収集－各市町村における教育課程の把握など－も必要だ

60 先生は博物館の観光振興についてどういう考えをもっているか
［回答］
・日本では、「観光」は 19 世紀前半に、「日本」民族意識、「文化」意識の確認と強調のために始まった。利害関係とは無縁の、誰でもが共通した感情をもつことができる場所（修学旅行で行くようなところ）が「観光」の対象として成立したのである。社会を構成する、より多くのメンバーが一定の価値観を共有することは、社会の安定に繋がる。そのための手段の一つとして「文化」、「文化観光」は有効であり、博物館は社会に対して、「文化」についての学術的に正確な知見を視覚的に提供する形で寄与できるだろう

課題と執筆のてびき

［課題］

・設定　本学民族資料博物館及び愛知県陶磁美術館以外の、任意のミュージアムへ行き
　　常設展示を見学する。

・内容　該当館の博物館展示事業及び、その常設展示のうち一つの概要、
　　並びに特徴的なパネル･キャプションについて論じる。

・仕様　用紙：A4 縦、書式：横書き、枚数：自由
　　展示室平面図（ラフスケッチでもよい）を添付または掲載すること。
　　パネル･キャプションについて扱う箇所では、現地画像またはラフスケッチを
　　添付または掲載すること。

・提出　2024 年 2 月 6 日(火)17 時までに、教務支援課(不言実行館 4 階)へ紙提出。
　　＊提出時に学生証持参のこと。

［標準的な構成］

タイトル

1 はじめに

　　レポート対象館選択の理由　－レポートで明らかにしたいこと

2 *****館と展示事業

2-1 *****館の概要

　　所在地・設置者・館種、基本理念・沿革・組織

　　事業概要（調査研究、収蔵資料、展示(常設･企画)、教育普及）

2-2 展示事業の概要

　　常設展示/企画展示、1 年間-数年間の構成

　　展示場所

3 *****館の常設展示｢******｣

3-1 常設展示｢******｣の概要

　　基本事項、会場構成、展示形態、情報媒体、資料配置･配列、展示技術、

　　展示意図、学術的視野、展示評価

3-2 特徴的なパネル･キャプション

　　設置場所･展示構成上の位置付け、基本構成上の種類

　　フォーマット･デザイン上の特徴

4 おわりに

　　調査･分析で明らかになったこと

　　レポート対象館における、常設展示とパネル･キャプションの意義

［評価の主要観点］

・レポート対象館の展示事業の全体像や、個別事業＝レポート対象展示の構造等を
　正確に把握しているか。
　　記載事実に不足や誤認がないか。(知識･技能)

・講義内容を踏まえた分析･考察が行われているか。
　　主観的な感想・イメージの展開のみで終始していないか。(思考力･判断力)

・レポートとしての構成力、文章力があるか。
　　冗長な文章または単純な項目羅列のみになっていないか。(表現力)

［留意点］

*レポートとは、客観的･論理的な文章である（↔主観的な感想、主張だけ）

　　問い－客観的事実－分析･考察－答え

*事実の把握

→事実に対する分析

　　対象館における、展示事業の全体像、レポート対象常設展示の特徴

→分析結果に対する考察

　　展示事業･レポート対象常設展示を、授業内容を踏まえて、評価する（意義付ける）

(2023.12.22)